

銀嶺

第二号



埼玉銀行従業員組合

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

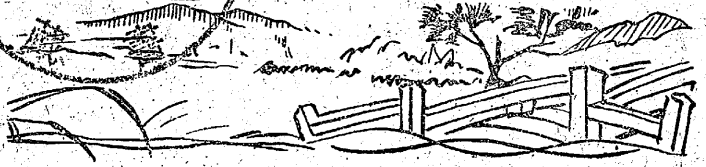
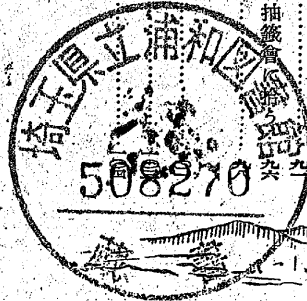
7

L050-キ



銀嶺——目次——第二號

△表紙(題字) 森田(角) 常務	△カット (大宮) 栗橋榮一
卷頭言……………頁	詩・短歌
評論研究	俳句・川柳
資金運用上の三原則……………二	創作
通貨措置の一考察(1)……………五	青春の夢(川柳風景)……………三
轉換期としての危機……………八	たなばたや……………三
「藝術と經濟」を透視して……………二	丁君の死……………三
隨筆	金藏落し……………三
戦わずして勝て……………三	解脫……………三
獨りごと……………三	重盛……………三
人を支えるもの……………三	父親と金助……………三
行人……………三	繼追う人々……………三
若き女性……………三	月光……………三
ラグビー漫筆……………三	逃げ道……………三
Essay……………三	七福定期預金抽籤……………三
貿易廳の思ひ出……………三	うそくらべ……………三
日曜のひととき……………三	銀嶺批判……………三
親女によせて……………三	あれやこれや……………三
日本映畫の回想……………三	銀嶺をよむ……………三
私の救主……………三	銀嶺によせて……………三
無關心……………三	編纂後記……………三



★(巻頭言) 明るい光

人間の善悪はその環境に支配されるという、然しわれわれはわれわれを取りまいて暗い環境に支配されてはならない。

近頃の新聞は強盗、殺人さては詐欺、横領と言つた記事の氾濫、が示しているように、世の道義心の頹廢を訴え、又世情はいくら潔癖でも闇なしでは生活の出来ない暗い實情が支配している更に又啄木ではないが「働けど働けどわが暮し樂にならざりき」とわれわれが身近く感じている環境は實に恐ろしいばかりだ。この暗い闇にバツト明るい新鮮な光の導入が是非共必要である。われわれはわれわれをとりまいて暗い環境はすべて拭い去らねばならない。これには並々ならぬ努力を必要とするがしかしこの努力を恐れてはならない。

心を明るく持て！ 朗らかになれ！ とは無理な注文かも知れないが、然し出来ない、アッサリ片付けるべきでもないように思う。これは恐らくみんなが念願している事だと思ふし、せめて埼玉銀行というこの一角だけでも御互いが笑顔で明るく働ける場所にしたい。全く出来ない相談ではない。相談相手はあなたたちで、これを組合が斡旋し、この機關誌「銀嶺」が連絡をとるのである。これが爲には勢のある指導や、理想的な機構も必要であるが、手近のところ自分の職場だけでも、血の通うまで團結出来れば、明るく働ける途も自ら展らけて來ると信ずる。そして大きくは又組合でガツチリ手を組んで進めば、如何なる難事もなし遂げられる。今組合に對する期待は犬さき然らば誰れがこの組合を運営するか、それはあなたたちである。役員はあなたたちの意見に従つて代行したり、時には取繼ぎをしたりするは過ぎない。即ちあなたたち次第で、組合は如何なる方向にも進むのである。是非共、光のある明るい方向へ進ませて頂きたい。その光ある明るい方向とは組合の發展であり銀行の發展である。その發展の基はなんと言つてもあなたたちの努力である。

資金運用上の三原則

本部 T・H 生

銀行の能動的業務即ち手形割引、貸付の如く他に信用を興うる業務は、銀行經營上將又國民經濟上極めて重大なる意義を有するものにして、銀行當事者の之れに對する態度如何は銀行の盛衰を左右し、引ては一國經濟上至大の影響を及ぼすべきものなり。銀行にして其貸付方針を誤らず、有益なる生産的事業を以て放資の對照とし、企業的才幹を有するものに必要なる資金を供給するにせんか、確實にして且有益なる方面に資本を運用するの風を助長し、以て一國生産の効力を大ならしめ能く國富の充實に資するを得べく、之れと同時に銀行は有利なる放資の途を得、其業務をして益々盛ならしむるを得べし。然れども若し銀行にして何等の定見なく、或は情實に驅られ漫然貸出をなすが如きこ

とあらんか、或は投機を奨励して、不健全なる事業熱を旺盛ならしめ、其結果信用を攪亂し、自己も亦其渦中に投ぜられて貸出金の回收不能となり、或は取付を誘致し、信用制度の擁護者たり又其中心たるの地位に在りながら却つて其攪亂者たるの誹謗を甘受せざるを得ざるに至ることなしとせず。果して然らば、銀行が能動的業務を營むに當りては如何なる方針の下に進むべきかは、獨り一國經濟上の問題たるのみならず、銀行經營上重大なる問題たるべきは多言を要せざる所なり。而して銀行が運用利殖する資金の主體をなすものは、銀行の信用に依つて吸收したる預金なるが故に、之れが運用に關し預金本來の性質より當然演繹せらるべきものは左の二個の原則なり。

第一、銀行は其資金を最も安全確實に利用せざる可らず。蓋し此事たる一見極めて平凡の如くなくとも、元來人が銀行に預金をなす所以は之に依りて直に利益を納めんと欲するにあら

ず、若し單に利益のみを目的となすものならば、必ずしも之を銀行に預金となさざるも他に多くの利益的放資の方法あるべきなり。之を預金と爲すは畢竟今直に適當なる放資をなすの方法なきか、或は之を手許に保管するも危険なるが故に安全確實に銀行に預け入れんと欲するに外ならず。然らば銀行は其預金本來の性質に鑑み資金利用の方法を安全確實なる基礎の上に置くべきことは最も重要な條件なりと云わざるべからず。若し其利用方法安全ならず、確實を缺き損失を蒙むるが如きことあらんか獨り銀行自身の損失に止まらず、社會は爲めに其悪影響を受けざる可らざることとなるべし。

第二、銀行が運用する資金は主として要求拂の債務を負うて得たるものなるを以て、之れを利殖する場合には、運用の途を要求拂又は少くとも短期なる定期拂の債權に求むることを以て原則とせざる可らず。即ち既に資金の利用安全確實なりとするも、當座預金の如き銀行に於て

預金者の請求次第又は小切手の呈示と同時に拂渡さざる可らざる性質の資金を通用して、不動産抵當其他長期の貸付に固定するが如きことあらんか、一朝金融緊縮して資金の需要増加し、一時に預金の拂戻しの請求を受くるも其貸付金は俄かに回收する能わず、銀行にして日常巨額の準備金を備えざる限り時に甚しき困難に陥ることあるべし。よし借入金に依りて一時資金の融通を受けんとするも、金融逼迫せる際は金利著しく騰貴するは勿論、銀行は一樣に資金の缺乏を感じる時なるを以て借入には種々なる不便を生じ、甚しきは支拂停止の止むなきに至ることなしとせず。然れども銀行にして其資金をコールローン又は手形割引其他短期の貸付に放資するに於ては、其回收迅速なるを以て、銀行が準備金の必要切なる時は新なる割引か貸付を手控うるによりて漸次資金を回收するを得べく、たとえ預金の引出増加するも之れが爲に甚しき困難に陥るが如きこと稀なるべし。されば銀行

は預金の種類、性質に應じて、その能動的業務を調節するは極めて重要な事項と云うべく、獨り商業銀行に限らず一般銀行の能動的業務は其受働的業務と其數量に於て相同じきと共に其性質を共にすべき事を以て銀行營業上の一原則とせざる可らざるものにして、此の兩業務を能く適合せしめて資金の融通を圓滑ならしむるは銀行の自衛上根本の必要條件たるなり。

以上三個の原則は預金本來の性質に鑑み當然の歸結なるが、第一の原則と關聯し又銀行の自衛上より考察して左の事項も亦重要なりと謂うべし。

第三、銀行は貸付金の危険を廣く分散せざる可らず。惟うに貸付上の危険程度は借主の財産收入と貸主自身の資産に對して、貸付金額が如何なる比率を保つかに依りて其の程度を異にするものなるが、銀行が同一の取引先に對して此の比率を超過して夥しき貸付をなさんか、銀行は貸付金の回収はもとより、銀行の死活は全く

一事業若しくは一個人の盛衰によつて左右せられ、時に一取引先の命維從わざる可らざるの悲運に遭遇することなしとせず。たとえ工場等の抵當物件ありとするも、之れが處分は容易ならず、銀行は本來の使命を後却して自らその事業の經營に參畫するの止むなきに立ち至るべし。而して此の種の危険は同一會社の株式に多額の投資をなすか又は一會社の株券を夥しく擔保とせる場合に於ても考えらるゝ處にして、之を當座貸越について見るに、元來當座貸越は銀行の側よりすれば手形貸付、證書貸付の如く其れ自身獨立したる貸付にあらざるを以て、取引の都度種々なる手数を反覆する必要なきも、金融逼迫する際には其極度迄引出され、金融緩漫の時には直ちに支拂われ、加之銀行は之れが爲に常に準備金を貯え置かざる可らざる缺點あるを以て、當座貸越の限度總額に對しても常に注意し、貸越限度の總額の巨額に上らざるよう務めざる可らず。斯くして貸付上の危険を保險事業

と同じく廣く分配することは銀行の自衛上極めて重要な事項と云うべし。

要するに、銀行が資金の需要者との間に立つて金融の疏通を計り、金融機關たるの任務を盡すと否とは一に係つて其預金の多寡に比例するものにして、預金充實して後始めて手形割引に貸付に資金を運用利殖し得るものなるを以て、預金の吸収はもとよ重要ななりと雖も、預金重點主義に偏することなく資金運用の面に關しても速かに根本方針を確立し最善の務力を傾注せざる可らざるなり。

通貨措置の一考察 (1)

調査員 山本博男

我國經濟が戦後の温室的封鎖經濟より國際經濟に參加する爲には日本と外國とを結ぶ爲替レートという狭いトンネルを通らなければ、世界市場で一人前に活動出來ない。今此のレイトが

どの程度に決まるか、問題となつてゐるが決つたレイトにより今後企業として成立たないものが出るから昨年より經濟界の注目はこの集中されてきたが愈々發表も間近のものと思はれてゐる。

此のレイト問題とからんでレイト維持の何等かの通貨措置が次の話題となるのは當然である。最近巷間に此の措置が近く行われるのであると、まことしやかに傳わつた。

又これとは反對に我國の場合は物價と通貨とがほぼ同じ速度で上昇をしてバランスがとれてゐるから特別な措置を必要としないと主張してゐる人もある。

然し乍らこれに對する私の見解として通貨の本質と我國インフレーションの特質より措置の必要性を明かにしてみよう。

一、通貨の本質

通貨の本質はその發展過程より明かな如く通貨は明かに一定財貨に對する交換手段であると

共に富の蓄積の一般的手段であつた。これは通貨發展の初期の金屬通貨の場合には説明を要するまでもなく明瞭である。その後經濟圏の擴大と共に通貨を多く必要となり、限りある金屬貨幣より、携帶にも便利な兌換紙幣が現れた。この紙幣も本位制度が維持されている場合に於ては紙幣は必要に應じいつでも金屬に替える事が出来るから、金屬通貨と同じ作用を維持することが出来た。

然るに戰爭には巨額の戦費がある。その戦費は初め税金、或は公債の國民に依る消化により賄われる。然し戰爭が長期に及ぶにつれ國民の負擔が限界に達すると赤字公債（國民で消化されぬ公債）を發行となり新たな通貨量が増えるから本位制度を維持出来なくなり、金屬價值とは何等關係の無い紙幣の濫發となる。かかる紙幣は金屬と關係の無い不換紙幣というもので全く財貨との關係を打ち切れ、その價值は發行量に比例して減少し、通貨の本質的機能を失い

正規ルートに於ては單に、各種購入切符の附屬的交換手段としての意義を持つてゐるに過ぎなくなつた。

二、我國インフレーションの特徴

現在の我國のインフレの原因は月報第二號の如く戰時中より財貨（特に消費財）の生産が減少して來たのに反し、需要は常に最低の絶對量が必要とし又、戰後の國內人口の増加、と戰災引揚者の増加需要もかわり、通貨の増加が無くてもインフレ昇進の要素は充分そろつてゐる。

この上に通貨増發の要因として生産に直接關係の無い國土の復舊費終戦處理費等（二十三年度に於ては四十%）に巨額の資金を要し我國インフレは各種の對策の網の目を潜り昇進の一路を辿つてゐる。こゝに我國インフレの根本的原因とその特徴を見出せるのである。

三、インフレ收束時に於ける措置の必要性
前述の如く持別の通貨措置を必要としないとの意見もあるが、この意見はたしかに、通貨措

置は、インフレそのもの、根本的收束對策にはならぬことは私も何等反駁すべき所ではないがインフレの昇進による經濟界の攪亂を考へぬ全く單純な意見である。

私としては我國としてはインフレの基本的要素（人口過剩、資源の減少、生産範圍の縮小等）通貨措置のみにより完全に排除する事は不可能に近いが、生産が或る程度（人に依れば戰前の約六十%）に達したならば通貨措置を行ひ之れを安定させ、通貨價格の連續的下落による、經濟の攪亂を除き、安定經濟機構を確立し、復興を推進する必要があると思ふ。今例をあげて立證すれば、紡績會社に於て第一次復元計畫として昭和二十一年八月に百二十二萬圓の復元計約六億の必要資金を申請し十二月に許可になつたがこの四ヶ月間の時期的ズレにより實際の復元は、その約七割の八十三萬圓にしか達せぬ状況である。これは全くインフレのいたすらであり、かゝ事情は大なれ小なれ我國經濟復興に悪

い影響を與えてゐる。

第二には、インフレ下に於ては通貨の價值下落により通貨の價值蓄藏機能が失われるから國民の預金に對する熱意努力が全く無くなる、この事は、今後の經濟復興に巨額の復興資金を要し（百三十萬の電源KW開發のみでも約千四百億を要す）この資金は九原則による健全金融政策を行うには一つに國民貯蓄によらねばならぬものであるが預金の吸收状況は、戰後インフレの昇進と共に全く不振である。

これを具體的に示せば昭和十年に於ては預金は通貨發行高の約十倍であつたが、終戦後は下廻ることもあり現在は相當よくなつたが昨年九月末猶一・五倍つてゐる。又最近の時事通信社の「もし餘裕のある金があつたらどうするか」という輿論調査の結果に於ても、

- (1) 飲食娛樂に使う 五七%
- (2) 現金で持つてゐる 二二・四%
- (3) 物は換える 三〇・四%

(4) 貯金する 三三・一％
(5) 投資する 八・四％

となつてゐるから實際に貯蓄する者がいかに少いかどうかはわからない。

この爲にも、通貨措置を行い價値の安定を計り、預金増強運動の一つの挺にしなければならぬ。

第三は、通貨措置を基準として單一爲替レートにより國際的物價水準に適合せられた國內物價を更に各商品の凸凹をなくした改訂をして各企業に合理への目標を與えることが出来る。

又前記の物價改訂により業種別の標準賃銀を明かにし、一定期間内に於て賃銀を上げる場合は、企業の合理化、生産の増加等により生産費に影響を及ぼさぬ範圍に於て認める様にし、積極的に、企業者及び勤勞者の生産意欲を向上させ、今迄の様に、或る産業部門の賃上が直ちに他産業の生産費に響き物價に波及し、全般的な賃上の導火線となり賃銀と物價のいたちごつこ

となつてゐる状態を清算出来る様になる。

第四は、物資の絶對量がたゞ今日闇市場を無くすことは困難であるが、通貨價値の安定に依り闇市場を狭め正規ルートによる流通秩序を相當程度回復することが出来る。

即ち今日の如く、通貨價値が次第に下落してゐる時は、個人に於ても企業に於ても、自己の能力の出来る限り不急品迄も買溜をし、闇價格を刺戟し國民生活を不安なものにし闇市場の存在の必要性を認めてゐる。

然し西獨の通貨措置後の事情よりしても必ず物資は闇市場から正規ルートに乗り、爾後の對策さへ良ければ維持も可能である。

然らばかかる通貨措置に如何なる方法をとる、それを何時行ふか、更に重要な問題であるが、紙面の關係上次回に譲ります。

「轉換期としての危機」

川口支店 規 矩 英 一

狂暴なる風は去り、慘憺たる戰禍の中に何物によつても遮られることのない自由が訪れても、今やあらゆる面に、過去と未來との相交錯せる轉換期としての危機到來に戰慄し、而もかゝる中にあつて我々には人間の「知性」に對する懷疑と絶望とをもつてゐる。そしてかゝる暗黒より脱出する道は二つしかない。一つは、科學的近代文化を拋棄し「新しき中世紀」——宗教的世界の再現であり、他の一つは、現代社會に於ける合理的進歩を阻む諸因を分析して、新なるより高次の社會的秩序を確立せんとするものである。果して歴史に於ける理性の進歩に對する信念は單に迷蒙に過ぎないものであらうか。

我々は、近代文明の持つ否定的、破壊的諸要素の存在を無視しようとするものではないが、併し乍ら知性を阻害する諸要素の故に、知性に對する信頼迄失われてよいものであるらうか。コントの言うが如く、知性とは、本能や感情の個別的利害を調和し、統制して、普遍的社會的利害

に迄擴張せしめ得るものであるとすれば、我々は、敢然と第二の道を選び、知性と合理性によつてのみ、より新しい社會秩序への道が開かれるものと信するのである。

我々のまわりを見給え。リュックを背負つた女、車を引く男、そして馬車を通り自動車が行き、空には飛行機が飛んでゐる。こんな光景は、どこの街角でも見られる所である。此等の雑多な交通機關は、夫々技術的發展の異つた時代を代表しつゝお互にスムーズに何の混亂もなく動いてゐる。しかしそれ等は必ずしも一定の調和・安定を保つてゐるのであらうか。否寧ろかゝるが故に、一度混亂が起されれば、一層深刻である。例えば空より投ずる原子爆彈により一瞬にして人馬は勿論、地上一切のものが姿を消すが如くに。たしかに我々は技術的進歩のその限りに於ては、誰しも最上の讚美を捧げて惜しまないであらう。が併しそれに比べて理性・道德等他の人間の性能の領域に於て、果して馬車の時代と

飛行機の時代に於けるが如き差異を、見出し得るであろうか。否そこに見出されるのは、お互に原子爆弾を以て最も原始的な闘争本能を充足せしめていたのではなからうか。そこに我々は人間性能に於ける「歴史的不均衡」の存在を知るのである。而も此の「歴史的不均衡」は、複雑な社會のメカニズムの中に於て、個人に、合理性、乃至は、道徳性が一樣に進歩しているであらうか。否そこには加うるに「社會的不均衡」が存在する。經濟社會に於て、自由を原理とする資本主義に於て、その發展を今日行すまらせる資本の「集中」生産手段の「獨占」は何に起因するか。「曰く資本家と労働者に於ける前者の知識權力の獨占。併して資本家と労働者の如き、機能分化は、元來先天的なものではなく、その時々、社會的構造によつて支えられているものであるが故に、封建的時代には、各々その領分に於て、夫々の性能を代表して何等の摩擦、混亂を惹き起す事もなく、そこにも又調和も保

たれて居つたのである。が併しそれは果して眞に安定し長く調和を保つて行く事が出来るものであるうか。今や我々は一刻も此の先我慢出來なくなつてしまつた。即ち現代の持つ二つの歴史的性質「一般的民主化」「一般的相互依存」の現象——以前には、受動的に動いた階級は、例えば労働運動に見られるが如く能動化し、更には、個別的な活動、機能等が愈々緊密化し、——かゝる現象に特質づけられたる現代社會は、前述せる人間性能の不均衡のために、崩壊と混亂の危機に遭遇しているのである。

かく現代社會は一方に於て、合理的要素をもちながら他方には、それに對する非合理的要素をもちしつゝ、そこに危機をはらんだ發展の姿を見る事が出来るのではなからうか。眼を轉じて、現代のあらゆる變動期としての動搖矛盾の究極の原因が今日、自由放任と統制計畫、即ち新舊二つの原理の無秩序な併存作用に歸する現代社會。——かの所謂、英國大産業の「嵐

と熱狂の時期」を中心としてスタートした個人の利己的活動、自由競争に永遠の眞理を見出した華烈しい自由主義經濟に於ける自由競争の原理も、Adam Smith がその必然的到來を信じて止まなかつた社會調和の理想境も、或は、その發展の過程に、マックス・シューターの所謂「感情的民主主義」の危険——近代大衆社會に於ける「社會的不均衡」の危険——に直面し、逆に獨占への轉化を始めたのであつた。即ち、個人をして自己の判斷と責任とに於て行動せしめればせしむる程愈々社會全體に對して何等の關心をもたず、相互依存の關係に對し、益々盲目的ならしめるに至つたのである。然るに現代に於ては、以前には、無意識的全體から孤立化して行つた意識的個人を、更に大きな集團的利益、意識的全體に編入せしめんとするのである。そこには自由主義に於ては、未だ狹隘な領域に限定されて社會的理性と道徳理性との最高の段階が「計畫」という段階を生れさせたのであ

る。併し「計畫の主體は、そしてその客體は？」そのつながらに於て、未解決の問題が幾多あるのである。がしかし、ここに言う「計畫」には、最早自由主義の發展の過程に見られた如き、權力や獨占による無理矢理に、安定化せんとする方法を以てしては、發刺とした「計畫」の構造は、決して見られないであらう。

要するに、我々は、未來の社會が如何になるかは、豫測し難い。過去の必然性と、未來の可能性とが辨證法的に統合せられた様相を示している現實を直視し、現代に於ける轉換期としての諸矛盾は、結局は、現代社會の全體構造に於ける同一過程の異つた表現に他ならないのである。此の危機に對する最後の責任は、我々の合理的思惟の缺除、現實認識の不確實をして歴史的自覺の脱落によるものではなからうか。

繰返して云う。現代と云う急行列車から降り、現實の危機を歴史的に正しく自覺し危機として受け入れる所に、前進の第一歩が存するのであ

藝術と經濟を通觀して

爲替總括課 佐藤起癡雄

藝術、この起源なるものは、人間は原始時代において、自然の現象に對し、他の生物に比して、無力であつた。この爲、對抗するすべを知らず、恐慌に驅られていた。この恐慌の起りは、自分達に對する漠たる悪意であると考へられ、物體なり、動作なりが、悪靈を避け又は、なだめる唯一の力であると想像された。この動作なるものが演劇、詩歌の起源となつたのである。これは、歴史の一齣にすぎないが、これと宗教との關係もある。と云い得るのである。演劇史的に意義のある發展を遂げたのはギリシヤである。良い氣候と甚だ進歩した共和政體をもつこの地方の民族は演劇に限らず、優れた藝術の世界最初の製産國であつた。紀元前七世紀の半ば

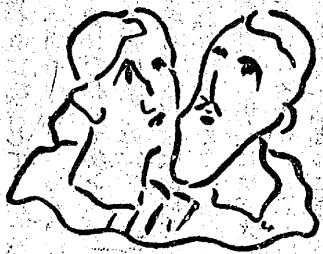
る。

既にディオニソスの祭禮はディオニソスの生涯の出來事を述べたストーリーのある歌を有し、合唱隊を有し、笛假面、舞踊をも有したと言はれる。資本主義國に於いては、政府の足によつて成し遂げられない。興行資本や、映畫資本の利益が必要となる。自分を損うことなく、却つて益々搾り取る様に伸縮性をもつた方針がたてられなければならぬ。敗戦によつて日本にも新しい時代が來た。民主主義勢力の勝利によつて、興行會社の従業員藝術家による運営が可能となり、また眞にデモクラティックな人民大衆の政府が出來る様になれば新劇の經營も、また以前とは異つた型を取ることとなる。進歩的演劇運動は決して單一の劇團の活動によつて成し遂げられるものではない。嘗てプロットがあつた時代には、日本國內の劇團が集中的な組織を持つたばかりでなく、國際的なファイナルの一翼として積極的に活動していたのである。現在我々は世界各國の進歩的民主主義的演劇と提携

しなければならぬ。また國內的にも反商業主義的藝術的に、良心的——民主主義的な諸劇團と提携されなくてはならない。一九三六年の初頭あたりから、一つには反動文化の重壓に耐えかね、一つには餘りにもヒシヒシと骨身にきたえさせる程激化した。社會的、政治的、文化的、藝術的な諸矛盾に刺戟されて、眞にリアリスティックな演劇に對する要望が商業主義劇團の當事者と観客との間に盛り上つてきつゝあつたが、今また新しい時代において、民主主義的演劇に對する要望が一層強く起つて來ている。

藝術は文學と並んで、此の世の美しさや人間のやさしさを見出す爲の第一のものだと云えよう。そればかりではない。最近のあまたしい世相に、人生の眞の姿を畫くものは、藝術の力であると私は斷言する。少し前迄のシリクタリズムの盛んな時は、藝術は、何と云うか病的な濃刺さを失つた青白いもの、様に考えられて來た。が藝術こそは美しいものだ。

文學藝術を通じて人生の理解を深め、心の愚な棘を、これらの微光によつて和らげ自分をも含めて、社會の廣さ、深さを理解することが大切である。前にも述べた如く、人間のやさしさ、美しさ、面白さ、悲しさを理解する。文學藝術以外の尊さ美しさはこゝにあると思ふ。



戦わずして勝て

經理課 武田 與一



昔ある男が知人の家を訪ねた。見るとカマドの煙突が直ぐで、しかも

傍に薪が堆高く積まれ

てある。彼はその家の主人に

「煙突は直した方がおもしろい、又薪の置場も至急變えた方がよい」と言つたが、主人は遂にその忠告に従わなかつた。

ところが間もなく火を失して火事を出したが、幸に隣人たちが身を挺して消火に努めてくれた爲め大事に至らずして済んだ。そこで主人は消火に挺身してくれた人々の爲めに大いに御馳走して謝意を表した。

そのときこれを見て某が言うには「若し君が

先きの忠告を容れたならば、火事の損も御馳走の費用もいらなかつたであらう。して見れば功のあつたのは先きに忠告してくれた男が第一等であるのに、一向そのことがなく、只火を消してくれた人々だけを招いて勞を謝するとは何事だ」とこれは漢書の霍光傳(?)にある有名な話である。(文字は違つが意味は同じのつもり)

世の中にはこれに類することは極めて多い。しかし事業を經營する場合には、火の子を冒して消火に努力した人々よりも、他人には分らない存在であらうとも、忠告した男のやうな先見の明あるものを賞し、重用しなくては發展しないであらう。泥縄式は如何に上手でも後手である。

昔ある銀行で、ある銀行の新株式を澤山買った。これを買つた人を假りにAと言つて置いた。ところがそのときBなる人はこれに反對した。理由は極めて平凡で常識的である。その人は「投資は普通の利益を目標とすればよいし、萬一を

考えて一銘柄に集中することはよくない。特に新株式は拂込の來る危険がある」と言うのである。

ところが間もなく財界のパンニックが來て、その銀行は閉鎖の悲運に立ち至り株式は只になつたばかりでなく、損失補填の爲めに未拂込の徴収が來た。驚いたのはAである。それからのAの働き方は目覺しかつた。如何にして損失を少くしようかと文字通り粉骨碎身、その銀行の預金を買ひ集めて、拂込に充て損害を非常に軽減することに成功した。このことは確かに不幸中の幸であつた。その後Aはいつもこの善後策の成功を自慢話にして居たし、他の人もこれを高く評價して居たようだ。

併し、私はこんな分らない話はないと思う。第一にこの事件では損害は皆無でなかつたのである。成る程、善後處置がよかつた爲めに損害を少くしたが、尙相當の損害を出したのであり、経費を要したのである。

第二に多くの人に心配をかけたのであり、Aの心勞は大變なものだつたのである。

これを若し、Bの言うやうにやつたならば極めて平凡ではあつても、所期の利益を擧げ得たし特別な心勞もなく、経費も要せず、然も大なる損害を出さずに済んだ筈であつて、銀行の爲めにどちらが利益であつたかは説明の要があるまいと思う。

併し、世の中はとかく花々しい結果だけを重視して、地味に平凡にコツ／＼と銀行の業績發展の素地育成に努力している人々を忘れ勝ちであるが、心せねばならぬことである。

孫子は百戦して百勝するよりも、戦わずして勝つ方が優れていると言つて居るが、正にその通りで、經營の指導者或は本部の幹部は「如何にして營業店は平凡に、しかも努力少くして利益を擧げ得るか」の方策指導に全力を盡すべきであらうと思う。

事件が起つてから努力するよりも、事件の起

らないように努力してこそ、努力のし甲斐があると言ふものであるが、事件が起らないと努力が無意味になるかのよう忘れられ勝ちになることは銀行の経営に限つたことではないが、私の最も遺憾と思うところである。本部の存在が忘れられている時が銀行の最も順調に發展して居るときであり又本部の努力が最も有効に發揮されている時であろうと私は思うが、どうであらうか。

(二四、二、二七)

獨りごと

本店營業部 西條ますみ

喧騒な市中の最中に邊りを感壓する如く堂々たる貫祿を示して聳える銀行、中にはきちんとした一分の隙のない行員たちが靜かに仕事をし居る。一見冷たさを感じる其の空氣に、私も冷靜な氣品のある性格と、女性の尊嚴性に觸れて見たいと願つて入つた筈だつた。

靜かに一日の仕事を終つて、後は社會問題や婦人の人生觀、そんな事を和氣藹々の雰圍氣の中に感得して、或る程度の生き甲斐を銀行生活に見出し度いと願つたのであつた。

而もそれが私の理想に過ぎない事が段々と判つて來た。銀行の生活は決してそんなロマンチックな夢を許さないし、現實の酷しさは、一瞬の緩みもなく私に迫つて來て、幾多の問題を投げかけて來るのである。

端的に言えば、大部分の女性の人生の最大の目的は結婚にかゝつて居ると言い得る。私が初めに述べた女性の尊嚴云々も、人格の完成も、個人の發展も、全て完全な家庭を營む上に向けられて居る。私は決して仕事によつて自立しようと思つて居ないし、現在の與えられてる職業が私にとつて人生の最大目的であるとは思感して居ない。然るに現實の仕事は、男子と同程度の能力を私に要求するのである。

男性の場合は明らかに人生と仕事とは完全に

マナして居る。換言すれば、男性は職業によつて個人と社會とを技能的經濟的に關係を結びつゝ、社會を自身の胞内に内在する文化への無限の發展性を引發して、私達内在の發展性と呼應させる事が可能である。女性にとつても、職業に全力を打込む事は、社會的基盤に立つて見る時正しいかも知れない。然し現實に私が其の戦士となつてつき進む時は躊躇せざるを得ない。若し私が敢然立つて男子と同じ様に仕事の面に活躍した時、私は多くの人々から尊敬を受けるかもしれないが、それは社會人として尊敬されるものであつて、所謂家庭内に於ける女性に相應わしいとしての好意や愛情を受けるのではない。何故なら家庭に入る女性として、結婚或は戀愛の對象として見られる時、女性の職業上の能力は差程問題にされて居ないからである。私個人としては勿論、職業上の手腕と、女性の特性を兩立する如く努力はするけれど、現實には中々の難問題に思われる。

若し私が仕事上男子と並び立つ地位、特に組合に於ける婦人部の主動的役割を與えられたと假定した場合、私としては進んで其れを受け、努力するのが當然であつて、自己の利害關係から拒絶する事は、社會的に不當であると思われ。そして其れを立派に務め終えた時、私は確に賞讃されるであらうが、之が度重なる時、其の方面の私の價値を大にして呉れる反面、女性的愛情の對象としての私の價値は過少評價されて、私の價値は前者に決定すけられてしまふのではないであらうか。

時々次の様な言葉を聞く事がある。貴女は方向を間違えて居る。仕事には男女兩方に適するものがある。貴女の全力を、男子と同様の仕事の面でなく、女性に適應した方面に注ぎなさいと。でも残念乍ら銀行の仕事の中には男子でも女子でも出来る仕事が多過ぎて、而も何れも良いかげんに濟ます事は許されないのである。女性が出れば男子を凌ぐ事も可能なのであ

る。
私がかう考えて居る中にも現實の流れはぐんぐん過ぎて、毎日同じ様な生活が繰りひろげられてゆく、愛情、女性的魅力、結婚、家庭、婦人、こんなつながりを意識して居る私の上に人生は執行されつゝある……幾多の疑問を持ちつゝ。

人を支えるもの

村山支店 豊 泉 三 郎

人は希望によつて生きる。理想のない人生がいかに無味乾燥なものであるか。たとえ健康的に、地位的に、経済的に、薄幸な逆境におかれていても、彼等は執拗に理想を堅持する。それは又暖衣飽食の人と同様であると言えるかも知れぬ。併しこの兩者の異なる環境にあつて、眞の理想とは無論前考であると信ずる。
即ち社會の諸情勢の悪化して、何等好轉の見

えぬ今日、健康に、地位に、經濟状態に、不運な恵まれぬ多くの人々がいる。毎日の生活に不自由な條件と困難に充ちた中にもいるのである。

斯かる人達は、將來の理想に期待をかけ營々孤々として努力している。とは云え冷厳なる現實に、或るものは萎縮し、或るものは自暴自棄となり、或るものは押し流され理想を失つのである。

そもそも人は、いろ／＼なものを信ずることを許されている。時には強制され、時には禁止されるが――

併し飽くまでも信頼出来るものは、結局自分の持つ理想以外にないであろう。理想は凡ゆる矛盾を排し正しい結論を導き、更に大きな最も確實な力となつてくれるものである。

理想と理性こそ人を支える絶對的根拠と信ずる。



行人

川越支店 小島 生

私はこれから私の拙い文章を持つて、亡き畏友綾部鐵郎君の事を書いて見たいと思ふ。同君は昭和廿三年十月二十日千葉醫大に於て亡くなられた。病名は脊椎カリエスであつた。

同君は人も知る我が埼玉銀行従業員組合の最初の書記長であつた。あの明晰な頭腦から迷り出る熱烈なる言語は如何に我々を奮立たせあの眞摯なる態度は如何にあの困難だつた組合の設立に力があつた事であろう。

彼は薄倅な人であつた。そして薄倅にあげず立ち上つた人であつた。しかし病魔が、彼をぢつと見て居たのに誰も気がつかかつたのだつた。

19
私は彼の葬式にも彼の爲に弔辭を讀まなかつた。私は私達の薔薇へこそ彼の悲しみを投ず

ることが一番良いと思つて居た。

彼も薔薇を愛して形も造つた一人であつたから、そして彼もそれを喜ぶに違いないと思ふ。

彼は私達が行員誌を創ろうとした時新誌名にゆくひと、と云う名を選んで來た。

これは餘りにも彼を表現して居る様であつた。淋しい感じであつた。そして彼は彼自身ゆくひとになつてしまつた。

私だつて勿論彼の胸中には入つて行つたわけではない。だから私の彼に對する觀察も或は異なつてゐる點も多々あるかも知れない。しかし私は彼の身近に居た一人として彼を描いて見たいと思ふ。

ちなみに、彼の薔薇に出したペンネームをお知らせしようと思ふ。村上信、由利子、阿部哲夫、鐵郎生、草野秋平、以上である。

Aさん(以下彼をそう呼ぶことにする)は少年時代から美男子であつた。小造りだが細い均整のとれた身體、そして女の様な美しいはだ、

通つた鼻が、いつかこの様な赤い唇びる。そして話しぶりもゆつくりとして外人の様な語尾にBを多く含ませた音階、彼と話して居ると彼そのものが詩であつた。

しかしAさんの家庭は淋しかつた。何れの事情でAさんの實母は家には入れなかつた。父は勿論幼少の時に死んで居た。薔薇四號に彼の『半生』と云う詩が出て居るが彼の心境が出て居る様である。そして彼の母は可愛い一人兒を殘して横濱のある町に淋しく住まねばならなかつた。

したがつて彼も少年時代は割に淋しく居た。そしていくらかひねくれ氣味であつた。彼が孤獨に育つたことは彼に一人で楽しむ事を覚えさせた。そして自然美が彼をそこがこれに導いた。山！高原！詩！彼は山のこと夢中になつた。そして高くおほらかな世界に彼は息を上げ、その法悦にひたつた。

しかし人間である以上、いかに一人の内に樂

しみがあると云つてもやはり孤獨は淋しい。Aさんも、一人で行く山が多勢で行く山になつて來た。新しく入つて來た私も仲間にいれられた。彼と一緒に居つた入笠山、雲取山は一生忘れぬ思い出である。

彼は山登りにも、彼獨特の敗けぢ魂を表わして居た。私は大體力が弱い方なのですぐに音を上げてしまふのだったが、彼は私と同じ位の、力しかないと思われるのに一言も疲れを口にしなかつた。あの女の様な體で、と私はよく驚いたものだつた。

それから文學、詩の趣味であつた。彼は私達の良くわからない事を熱心に研究して居た。大ていの人は親しくなると言葉もぞんざいな言葉つきになつたものだが、彼はいつでも丁寧だつた。若い人達が増えても彼の存在はやはり孤獨の場合が多かつた。

彼は良く私と淺酌を交したものだつた。その時も私の方が言葉が多く、彼は聞き手であつた。

彼は私と同年代なのに私よりはるかに色々な事を知つて居た。彼は彼自身の孤獨さから人なつこい私と話しをすることによつて離れたかつたらしい。彼は又レコードを買つて來て私の家へ置いて行つて時々來てはかけて楽しんでたりした事もあつた。兵隊検査も一緒だつたし、あのいやな月例検査も一緒だつたので私達は尙親しくなつた。

その内に彼は、召集令狀が來て出かけて行つた。私はその頃病床に居たのだが、彼は坊主あたまも青々しく病床に挨拶に來た。その時は戦争も益々苛烈になつて來た時ではあつたし又會えぬ人かと思つた。彼も長く病床にある私を見て反對にそう思つたかも知れない、とに角淋しき別れであつた。

でも幸にAさんは外地へ行かないで済んだ。そして時々外出には横濱へ行つてお母さんと楽しんでた様であつた。

足かけ三年で彼は解除になつて歸つて來た。

早速彼は浦和へ通い出した。歸つて來てからは私とはなれてしまつた彼であつた。そしてまもなく彼が今度は病床に親しむ様になつてしまつた。肋膜炎であつた。彼が良く薬びんを下げてかくそでの外套を着て醫者通いをして居た姿が私は今でも目に見える様である。

しかしこの短い浦和通いの生活に彼の秘めた戀愛も起つたらしいのだつた。それは勿論結果に於てはむすばれなかつたであろうが、彼の生涯に於ける一つのうらおいであつたらうと思われる。

そして全快して川越南支店勤務になりその内組合運動の發生となつたのだつた。私はAさんがあれ程の雄辯を持つて居たとは全然知らなかつた。それは兵隊生活中につちがわれたものなのか、或は以前より胸中にあつたものか知らない。しかし私には、意外であつた。そして驚きは、尊敬に變つて居たと云えよう。

若き天才は薄倅であつた彼は再び病魔におか

された。しかも余度はカリエスに迄なつてしまつたのである。そして千葉醫大へ川越から病院車にゆられて入院した。これには轉地の療養だけでなく彼の家へは入れない彼の母との對面も欲したのであろう。事實彼のお母さんは彼の死ぬ迄同病院で彼を看病し得たと云うから。

彼の短い生涯で最後の二、三ヶ月が彼の母と一緒に居た最も長い時であつたろう。天もあわれと思われたのか夏中は越せぬといわれた彼の病氣も十月の末迄長らえて居た。

そして長逝してしまつたのであつた。薄倅の彼の詩は薔薇にのつたものが全部とは云えないだろう。しかし最近の作は殆どのつた様である。創刊號當時の彼は昔の思出を描いて居た。海濱の詩があつたが、いつか話してくれた彼の幼い時の思出らしい。

三號には病氣の苦しさが出て居た。四號になると彼の絶筆になつただけ、思出や、戀うた人への思慕や悲しき連想へと行つて居る。

若い時代の日々は多くの無軌道なロマンチックな夢に満ち溢れている。それは未知の世界への限りなき憧れであり不安でもある。旺盛する青春の躍動は一刻も静止する事がない。時には外面的に行動として現われ、時には精神的に沈化して悩みとなる。

結婚という言葉は確かに私達から若さを奪うかもしれない。私達からローマン的な夢を失わしめて大なる精神的な轉換を要求するかもしれない。この意味よりして結婚という言葉が乙女の感傷をゆする事は否定できない。しかしながら若き日の夢は神秘的なものへの、ローマン的なものへの憧れであり、現實生活に根ざした強いものではない。盲目的な愛は現實の中にとけこんでは居ない。現實の嵐は思想的に、經濟的に、政治的に私達の足許を吹きまくつて居る。この嵐の中にあつてしかも着實な強固な愛を持つ續するものこそ夫婦愛でなければならぬ。愛情なき夫婦生活の實態に就いては歴々耳にす

病み臥せる身を忘れよと消息の
絶へしを泣くと君よ知らぬな

忘れ得ぬ思われ人の歩みくる

音に似たる春の雨足

春たけて外人墓地ははかなしや

櫻散るちる白き十字架

彼はたしかに成人した。そして我々の及ばぬ頭の芽えを見せた。しかしやはり孤獨だつたのだと思う。彼は淋しい人であつた。しかし彼はそれを打ふつて立派な人格をかたちづくつたのであつた。しかし孤獨な者の健康は注意をしなければならぬ。彼の弱い身體は彼を再び立てない身體としてしまつた。

私は彼の薄倅に涙をそぐ、と同時に彼の天分がまだ芽が見えたばかりで折れてしまつたのが悲しく思われるのである。

若き女性へ

本店營業部 内山美根男

る。これは誠に悲しむべき事實である。私達は夫婦愛の理想、結婚生活の理想を樹立しなければならぬ。かくてこそ結婚は女性にとつて人生の墓場でなくして、より高次元なる愛情の生活への場となるであろう。

私は次に石川氏の「結婚の生感」という著書を中心に結婚生活の有り方の二つの例を述べてみたいと思う。

結婚を常に否定的に考え、結婚は人生に於ける自己逃避であり且つ清純なる孤獨への自殺であると考へつづけた私は、やがてはより良い結婚を夢みながら放浪していた丈に過ぎぬ事を悟り、平凡な古めかしい結婚という形式の中に無限の複雑性を持ち、完成したる生活の様相を見出しうるに至つた。私は結婚生活というもの夫婦の愛情の交叉であり、ある理想とどうか秩序というものによつて導びかるべきものであると考へる様になつた。

これはやゝもすれば惰性的な、平凡な生活に

陥りやすい夫婦生活を意識的に引き上げて行くうとするためである。私は愛情を二つに分け、奪う愛（相手よりむりに愛を受ける事、即ち原始的には愛の極致を示す）と與える愛とし、先ず奪う愛を全く否定し與える愛のみによつて生活を打ち建て、行こうとした。

私は家庭生活に全力を打ち込み、妻に對しては努めて教育の時間を授け勉學の必要性を強調した。私は平凡な其の日々を情性で送る夫婦生活を犬や猫と同じ動物的な生活であると言ひ、妻に對しては教養の高さ、感情の美くしさを積極的に要求したのである。私は家庭の内部の事は勿論、子供の教育法までも研究し合ひ、時には妻と共にスポーツに、音楽に、旅行にたのしみ、妻が小さな家庭生活の殻に閉じ込められることを拒否して行つた。たしかに私の理想は高かつた。そのため私は妻の態度や日常の有り方について不満もあつた。よく妻は「貴方の言う事は良く分るのですが、でも私はこれで勢一杯な

のです。私は頭の悪い女なのです」と悲しく私に訴えることがあつた。

私はかくて一年の歳月を送つた。私は次第に與える愛のみによる生活は苦痛の生活であると悟るに至つた。かゝる愛情は夫婦の間に自由と我儘を許さない。緊張し切つた日常生活の雰圍氣は私はたえられなくなつてきた。私の最初の考え即ち「愛は惜しみく奪う」というが、それは動物的な愛であり、高い文化人はそれにふさわしい愛の方法を持つべきである。奪う愛には永續性がない。眞の愛は與えられて育てるものである。……この考えを生活の根本方針と思つてきた。所がこの固定した思想は新しい次の思考の邪魔をする事になつた。私は家庭を時にはうるさいものと感じながらさう感ずる自分を責めつづけてきた。奪わざる愛を理想としたため奪う愛を認め得なかつた。奪うまいとする窮屈さがたえずつきまとつていた。私自身奪わざる愛を標榜して、そのため實際の生活を窮屈な世

界に追い込んでいたのである。現實の結婚生活とは、もつと理解しきれない。底のしれないうるさいを持つた、あるいはもつと低俗な素朴なものであるかも知れない。私は自由と我儘と素朴な愛の表情としての奪い合う事の必要性を感じた。人生には奪われる幸福というものがあひしかも大いなる價值を持つてゐる。結局奪い合ひ與え合う所に眞の夫婦愛の姿があると思う。私はかくして夫婦生活の二重性を發見した。具體的に言へば一つは自由と我儘を容認する素朴な原始的な愛情生活であり他の一つは、人生觀照の高さ、藝術的な理解の深さを求める智的にして情操的な生活である。私は素朴な愛を基盤として其の上に咲く夫婦生活の理想の美しさをみるのである。

ラグビー漫筆

飯能支店 寺田市郎

秋風が立ち初めると毎年の事ながらラグビーフラインに取つてシムズン来る！と思つとはのかなる胸のときめきを禁じ得ないものがある。私も思えば長い事ラグビーに親しんで来たものである。學生時代からこれまで二十數年にもなるがなお且つ私を離さないあの魅力は私だけではなくラグビーを愛する人々には共感するものがある。

初冬の空にひびくホイスルに縞馬の如き若きラグビーがその青春を賭して母校のジャージーの傳統に賭けて激突するあのビッグ・ゲーム直前の息詰まる如き雰圍氣こそは正にあの楕圓のボールの持つあやしき魅力に憑かれた人々にはたまらないものである。

戦後青山の舊女子學習院跡に東京ラグビー場が出来て今冬の如きは關東大學ラグビー王座決定戦早明ラグビーには四萬のファンを集めて熱戦を展開したがその内容は戦前のレベルにはいまだしの感があつたのは戦後各スポーツ界共通

の現象ではあるが昔を知る者にとつては淋しい感があった。

思い出しても昭和五、六年頃のラグビーはその黄金時代であつたろう。

明治は戦車 FORWARD を擁し、T・Bには、WING に駿足機關車の様な馬力を持つ鳥羽あり、セクタースリークォーターには辻、岡の如き名手ラル・バックには笠原恒彦早大はスピードに富む FORWARD が得意のゆさぶり戦法を持つて激突そのサイド・ステップ飛燕の如き名 T・B 柯子彰荒賀がタイム・アップ五分間獅子奮迅の勢いで明大陣ゴール前に左右にゆさぶつた壯絶な快戦は今だに忘れ得ぬ試合でありその後これに勝るゲームを見た事はない。

ラグビーは青春の華であり、ラガーはスポーツマン中のスポーツマンである。ダックルを外してボール目がけてボール小脇に突進する派手なジャークシーを着たラガーに叫聲をあげるミス・ラグビートはスタグジドに咲く花

であろう。

スピードを要求する近代人に向くラグビートのスリルと豪快さは野球の如きは同日の談ではない。去年ラグビー五十週年記念祭が行われたが今後ますますラグビーが普及されこのウイメント・スポーツの華ラグビーを樂しむ若人が増える事を衷心より望むものである。

MUSIC A

大宮西支店 尾

崎

ムジカとは伊太利語の音楽の意である。即ち英語の Music である。元來音楽ばかりでなく詩歌、辯論、舞蹈等や更に文學や哲學をも含めて意味したものらしい。で藝術の神のミニウズから遂に音楽を云う様になつたものである。

搖籃の幼兒慈愛こもる母の子守唄にすやすや眠るのを見る即ち幼兒に其の子守唄のメロデーが唯意味なく慰安を與えるからである。我々人

間に與えられた本能的感受性があるからである。又日常我々の生活に於いても非常に愉快で嬉しき時には勝手に自らリズムを伴つて吟む事さへある。要するに音楽は我々に快活さを與える力を有している。然も之れは誰にも限られた物ではない。何人と云えども此の事實を認め得るのである。或は唯無意識の中に起るから自覺せぬ場合もあるが、浴場等に於いて身も心も溶けんばかりの境地にありて、無意識に詠曲や浪曲を呻る人を見受ける事がある、之れ全く同一理由である。唯人に依り趣味上から洋樂とか邦樂とか或は其の他各種音樂に就いて夫々適不適の差異はある。

27 ムジカは誰にも理解される藝術の一つである。そして此の音樂が我々に及ぼす影響は相當大なるものである。我々の生活より分離して考える事は不可能である。何故ならば悲しみや、喜びを強く感じた時其れを言葉で説明する前に或は高く或は低く、自然に呼びたい衝動にから

れる。人間の原始時代には簡単な呼び聲で叫び合つて自分の感情を示し合つて居たものである。故に生活と切り離す事は出来ない。次に音樂の吾人に及ぼす三大作用を述べると、

(一) 我々を樂しませ慰めて呉れる事である。ないものである。
(二) 小にしては吾人の性格を善導し、大にしては社會の風俗を善導する働きを持つて居る。近時落着きの無い輕薄なる音樂の一種が流行し出して一部の人には落着きの無いフワフワした傾向を見受けられるのも通例である。よく音樂の特質を知つて夫々の特性に従つて利用しなければならぬのである。

(三) 音樂を自分の精神生活の一部分として取り入れる事である。即ち樂曲には其の作曲者の精神生活が表現されているから其の曲を正當に味う時には、之れを聞いて作者の人格が自然に自分に移り移つて來るべきである。故に良き音樂

は良き人格を作ると言うのは此の意味を言ひの
 ではなかるうか。之れが即ち音楽の本來の目的
 で單に一時的な娛樂や慰安ではないのである。
 西洋音楽は理解に苦しむと云う事を良く聞く
 が、之れは餘りにも特殊な藝術と考ふるからで
 ある。要するに西洋音楽は色彩畫であると思え
 ば良い、複雑なる色彩の調合、調和に依つて吾
 人の目には美しいと云う心が起さる。之れを全
 く同一現象に洋樂も非常に複雑な音の集合に依
 り調和を保ち華麗な景を描き出した物である。
 之れに反して日本音楽は一色の線畫である。丁
 度墨繪の如き物で南畫の如き觀がある。従つて
 日本音楽と西洋音楽と何れが良いか等と評する
 は愚も甚だしき物で何れも其の生命とする所は
 總て同一であつて比較す可き性質の物ではな
 い。何故ならば色彩的な洋畫と深遠なる味のす
 る邦畫とを同時に並べ比べる可きものではない
 事と同一であるからである。
 最後にムジカと生理現象について。音楽には

リズム、テンポがある。此のテンポが人體に作
 用した場合には吾人の脈搏は此のテンポに合致
 して行くのである。従つて早いテンポの曲を聞
 く時には幾分興奮的な輕快を感じ、緩やかな曲
 では自然と心の落着きと淋しさを味う物であ
 る。又米國の或る醫學者の説に依ると食事中に
 音楽を聞く事は胃の働きを害する、と述べて居
 る。之れは音楽を聞く事に依り胃に行く可き血
 液が頭に行くからだ、と説明して居る。之れも
 事實だとすれば亦面白き現象である。斯くすれ
 ば日本のラジオ等は晝の音楽等と稱して國民の
 健康を害する物かも知れぬ。之れも又外國の話
 だが、乳を取る牛に音楽を聞かせると乳の出る
 量が増加すると言うのであつて現に米國の或る
 牛乳會社では之れを實施して好成績を擧げてい
 るとの事であるが、之れも或は血行に影響して
 いるのかも知れない。従つて音楽の作用の及ぼ
 す範圍は唯に我々人間のみならず他の動物にも
 及ぶ物かも知れない。將來此の種の研究が進め

ば相當面白い利用方法も出来る事と思ふ。
 以上音楽の外形的な事を述べたが要するに我
 々はより一層音楽に親しみ、せめて、ペンとソ
 ロバンの疲れを發散したいものである。音楽鑑
 賞會も大いにやりたい。又出来れば我が躍進明
 朗に則り音楽部も結成したいものである。

貿易廳の想出

外國課 星野 享 昭
 西村 平

七月一日午前八時二十分我々二人即ちNとH
 の貿易廳初登廳である。ガランとした階段を登
 り昨日示された部屋、資金課分室に入る。誰も
 居ない。先ず我々に與えられた「デスク」の前
 に坐り煙草に火をつける。それから電車で讀ん
 だ新聞を讀みなおす。九時タイムストが一人來
 た。又煙草をのむ。という譯で大體そつたの
 が九時半である。それから課長、局長へと形通
 りの挨拶を終え、こうして我々の半役人生活が

始まつた。
 一體何故我々が貿易廳へ行くようになったか
 というに約半年に渡る當時の調査課員の本當に
 血と汗の努力が報われ勿論當時十分認められて
 いたが多少土莫かつた吾が埼玉銀行が一躍大
 銀行に伍し外國爲替を取扱ふことになつたので
 ある。
 當時爲替會の取極で外國爲替取扱銀行は貿易
 廳へ派遣員を出すという慣習によつて我々二人
 が埼玉銀行を代表し貿易廳へ行くことになつた
 のである。
 暑い最申業者に机をとりかこまれて、圓價代
 金支拂指圖書の發行に悲鳴をあげたのも暑苦し
 い想い出の一つであつた。近くに新橋演舞場東
 劇等の歌舞伎の殿堂や日本のスタイルの尖端を
 行く人々の潤歩する銀座八丁はあつても財布の
 軽いサラリーマンには高嶺の花の感じを與えるだ
 けのものでしかない場合が多く晝休には唯ブラ
 くと歩くのみ。

武田麟太郎の「銀座八丁」に表現された銀座は戦災の爲消失され表通りは露店まで出てたゞでさへ狭い歩道を一層狭ばめて道行く人の足並を停滞せしめる程繁榮している様に見受けられるけれども本當の銀座の雰圍氣を持つていた裏銀座は復舊進まず道路も建物も焼けたまゝになつてゐる處も見受けられる程です。新銀座建設を目的とした川の埋立工事も着々進められ戦車改造のブルドーザーが道行く人の足を奪つていきました。そのうち人の目を奪う様なニュー・ギンザの偉容が出現するのを楽しみに待つことにしましょう。

とこう書いてくると如何にも我々がブラ／＼してばかり居たようですが決してそうではなく朝なども定刻前に出勤し業者が押しかける前にその日の準備をしたものでした。我々にとつては他銀行の人々に負けてはならぬと思ひ眞剣そのものでした。ですから三塚課長に「大井事務官が君達をほめていた」と言われた時は本當に

うれしく後で互に「よかつた、よかつた」と言い合つたものでした。

貿易廳の資金課爲替係は各銀行よりの派遣員達で同年配の人々ばかりで仕事をしていた關係上甚だ愉快な勤務で業者に苦しみられた想い出より彼等と五圓のコーヒーを飲みながら駄辯つた想い出の方が懐しく感じられます。

夏から秋そして冬と氣候が移るにつれ仕事も段々と慣れ、始めは何にも知らなかつた小生等も少しは外國爲替の初歩が理解されて來ると共に業者の質問に對し強心臓を發揮したのは今考えてみると冷汗三斗という形容通りです。

「朱に交われれば赤くなる」でもないでしょうが始めは驚いていた官廳タイプの應待にも一カ月二カ月と經つ内に習うより慣れるで自分もそんなタイプに近すきつゝあるのを自覺する度に「？」と思うのも度々のことでした。

貿易廳という所は貿易業者を相手とする所だけに他官廳に見られぬ活氣を帯びた所でした。

何しろ役人の數より押寄せて來る業者の方が數倍多いといふ全く戰場のような風景が終日續く有様です。勿論此處もご多分に洩れず官僚的といふ言葉で代表される風があります。この事は我々の見た所役人の非もさることながら業者自體にも多分に必要以上に役人に卑屈になるといふ缺點もあるようでした。

役人、業者こういふ人に接していると何と云うか丸ノ内のサラリーマンと違つた圖太い神經が得られます。

31
我々の仕事も段々變り信用狀や見本輸出の仕事をやめる様になつて困つたのは今の日本人には「猫に小判」ではあります矢張り小切手には變りない外貨小切手を机の引出にしまい、信用狀は机に出しつばなしといふことでした。銀行では思ひもよらぬ事でしょうが金庫一つない我々の課では如何なる重要書類でも係官の机の引出に鎮座するのみで萬事Q・Kなのでした。

寒くなるとオーバー着用のまゝ執務、業者は盜難豫防の見地からオーバー着用のまゝ。業者係官いすれもオーバー着用とは終戦後の官廳執務の一異彩たるを失わないでしょう。

我々の月給與百圓、税引き八十圓也はちよつと時代離れのしたのですがそれにも増して仕事の量も多い時は物すごいものでした。机の上は書類の山で如何にもならなかつた時もありました。小生等が貿易廳へ行つた時はもう仕事の量も減少の傾向があり人員も段々に多くなつて來たので昔程のこともなかつたのですがそれでも新橋演舞場がはねて人々が歸る頃漸く歸つたこともありませう。貿易廳勤務で得たことは各銀行の外國爲替を取扱つて居る人々との交際が出来たこと、これは全く我々にとつては大切なことで東京の爲替取扱銀行の何處にいつても必ず一人か二人貿易廳で一緒に働いた人が居り各銀行間の横の連絡に非常に役立つてゐるのです。それともう一つは、始めは信用狀の信の字も知

らなかつた小生等が甚だ淺薄ではありますが、現在の外國貿易爲替業務のアウトラインを掴み得たのも、貿易廳生活の賜です。

貿易廳の勤務は、非常に局部的に分散されていて爲替係の仕事を一通りやれば、大體の事は分るようになったと思ひます。小生等は特にその中でも最も特殊な部門である、外貨小切手等による見本輸出業務、信用狀のペラシス及び手形統計等を主として取扱つていましたのですが、それでも貿易廳勤務は小生等に種々の點で非常に有益であつた、と思ひます。特にサブライヤーの名前とかその取扱商品果ては彼等の氣風或いは現實の我が國輸出の状況等についてある程度の知識が得られたことは、何にもまして有益でした。

資金課では毎月各行の外國爲替手形取組高を表にして發表するのですが初の頃は當行は月に二件、三件という有様で心細い思ひをしたものでした。よく隣りの興銀氏が「埼玉さんどうだ

いうちは今月は五件だぞ」とからかつて來たものです。そこで吾々は「資本金のない銀行のくせに何を云うか假令件数は少くともうちには爲替のエキスパートがチーフにいるし、課員には少壯の粒揃いがそろつているのだまあ先を見よ」と反ばくしたものです。

それが今日では毎月件数を増し二月は二十件を越しそうなのを見ると感無量のものを感じます。然し吾々の夢はこんな所に止まつてはいない。將來はニューヨークにロンドンに、上海に世界の金融の中心地に支店を設け、又地球上あらゆる地點にコルレスを有し低利な外國資本を導入し、或いは外國市場へ投資し、會ての自由經濟時代の如きスベキユレージョンは出來ないであらうが世界經濟に密接に結ばれ、この東京が會ての上海に代つてアジアの金融の中心地となる時代がそう遠くない内に必ず來るのを確信し、その時資金の最も機動的な運用を計るのは、一人外國課のみでなく、埼玉銀行全體の

問題です。本行を多年育成し來られた偉大な諸先輩の夢を實現するのが吾々の責務とも思ふのです。

以上雑多の思ひ出をたゞ思ひつくまゝに、書き列ねましたが貿易業務が政府（貿易廳）の手から民間に移されるにつれ銀行の仕事はそれに比例して増大して行きます。又それだけ吾々の仕事の量が増加し銀行の外國貿易に對して占める役割はそのパーセンテージを増して行くのです。それ故吾々外國課の者は一日たりとも、安閑とはして居れぬ現狀です。現在吾が課の業績は他行に比して大分の差が見られるのは僞わらぬ眞實です。しかしこれには種々の理由もあることで一朝一夕には改善出來ないと思われま

す。しかし行員各位が新設の外國課が今後とも躍進して行く上の御指導と御鞭撻を吾々外國課にあたえられることを切に希望しています。

貿易廳の方を三内君にゆすりこの東京支店の二階のさゝやかな部屋に戻つて見ると古眞の感

じが湧くと共に貿易廳生活の様々の断片がなつかしく浮ぶのです。外國課の窓から眺めると夜のとばりも降り始め丸ビルの窓々の明るい灯が前の池に美しく映えてゐます。そして左手に東京驛の薄暗い建物が巨大な姿を横たえています。銀座八丁には色々の灯が善悪様々な想いをこめてともし始めた頃でしょう。

日曜のひととき

秩父支店 豊

田

「赤い袂のお人形は鹿の子しぼりの晝夜帯おん東京都の上京のいと乙女のこしらえた振袖人形よ可愛いな」どこから愛らしい歌が流れて來る。……日曜日のひととき久しぶりに裁縫臺にむかつて一心に老母の着物に針を運んでいた私は、つと裏庭の鶏小舎の前の日向に敷かれた「ござ」の上の吾子をみつめた。

うす茶のセーラーに厚地のつりズボン手は霜

やけで赤くふくらんでいる。どこから見ても男の子そっくり永くゆれる黒いオカッパだけが女の子らしい吾子が一人歌つたり踊つたりしている幼稚園の遊ぎの練習らしい。私は思わず針の手を止めてうつとりとみとれて仕舞つた。父なき子とは思えぬはつらつとした吾子の姿。歌に合せてしとやかにたゞすむ人形の容姿赤い振袖を本當に着せてしぼりの帯を高く締めつてやつたら、ぼんやりと寸時淡い夢の境にふけた。

「お母ちゃんも一緒にうたつてよ」；吾子のはしやぐ聲にハッとめざめて母と子の合唱が冬の陽に解けこむ様に二番の歌となつてたのしい日曜のひとときをめでるかのように庭のすみすみ迄ひびいた。アメリカさんのお土産に買われて抱かれて行く朝はさよならハイチャも胸の中お泣きなさるなお人形よ泣けば袂がぬれますよ。」

親友によせて

審査課 大久保節子

只今御手紙落手いたしました。驚きの後の嬉しさは又一入でした。

何度も繰返し拜讀いたし感慨無量でしたわ。季節同様の私の心は、寒風の吹き荒ぶ鉛色の空のように何かどんよりして冴えない、それでいて冷々した空しさです。何を見ても無感動な味気ない日々をすごして居ます。

近頃以前にも増して虚無的です。

先日お會いしてお話した時の心の亂れをもう一度振りかえつて見ようと思つています。と云つて自己嫌惡に陥つて低迷している私を思うと自分自身が可哀想にさへなつて來るのです。けれど自己嫌惡に陥る程自覺するようになったと云うことは一つの進歩のように思われます。貴女も！「悲しく造られたる人間」こう云う事をお考へになつた事がありますか苦しんで悩んで生きて行こうと努力する者、こういった人間達は生れ乍ら悲しく運命づけられて居るのです。そうした運命に對する諦觀を持ち始めた私はな

おさら生活に無意義を感じ乍ら自分自身を卑下しました。

ですから今の私は無神論者です。

こう書くのが恐い位ですが本當なのですから仕方がありません。信仰について良心に關聯して考えたこともありますが、およそ宗教と云うものは、死の直前に於てしか分らないものだと考へているのです。然も神と云うものは、ありはしないと云う冷淡な氣持でいます。

こんな氣持から確かに存在する物、即ち現實的なものを求めて止まらなくなりました。本當に幸福な人間それは凡人であらうとする人ある事の出来る人のことかも知れません。求めねばやまない者こそ不幸だと思いませんが、然もその求めるものは容易に掴めませんですから現實にあらざるものを私達は求めるのだとも云えます。

35 人間の生命と云うものも、この求める力を云うのではないのでしょうか。

今の私は現實に少しでも満足せずに反抗しつゝあるものを求めていきます。

近頃苦しい時は一人で飛び出しては映畫を見て歩きます。後で一人考へ乍ら宵の道を歩く時が今の私の一番楽しい時ですの、この時こそ總て自分自身創造の情緒に心一杯ふける事が出来る時でしょう。私は超現實的であり、ロマンチストでもあります。現實は現實、夢は夢としていますが、何時しか現實を理想の夢に結びつけて考へて行動している自分に呆然としてしまします。この矛盾に満ちた私をお笑い下さい。

かしこ

「日本映畫の回想」

本店營業部 佐波一郎

若い人達と映畫の話をしてしていると「最近の日本映畫はつまらない。」と云う事をよく聞く。勿論私も同感である。だが何處がつまらないか

と云われると少々困る。實は私は終戦直後の日本映畫に失望して以來日本映畫から遠ざかり、其の後昨年「夜の女たち」を見て又々期待がはかれてからは全然見ない事に決めてしまったのである。何故私が「夜の女たち」に期待したか、それは演出溝口健二の名に引かれ、嘗ての……と云つても戦争の影響下に巻き込まれる以前の……彼の下町的な、回顧趣味的な作風を思い、「祇園の姉妹」「浪華悲歌」。又は「愛怨映。」に示された彼のリアリスティックな眼を懐しんだからである。

洋畫には戦後相當の秀作があるにもかゝらず、何故に邦畫には見るべきものがないだろうか。製作費等の経済的な問題も多くあろう。併し戦前の作品は短時日に作られたものでも演出者の個性が作り出す藝術と云う感じが深かつたし、又世相をよく見つめ、それを反映もしてゐた、……と見るのは吾々年輩の者の回顧趣味だろうか。

何はともあれ私には時折古いプログラムを取り出し、又昔の映畫メモを眺めて見る癖がついてしまつたのである。

トッキー以前の無聲映畫は、私にも記憶が薄い。それ以後の古い映畫のとりとめのない回想を此處に繰り返して見ようとするのである。題名に附した年代は大體誤りはないと思つが、自分が見た時を書いてあるかも知れない、それでも封切された時と大差はないと思つ。

古い日本映畫と云われて私の心に先ず浮ぶのは「鯉名の銀平」(昭和八年)。「杏掛時次郎」(八年?)。「一本刀土俵入り」(九年)等一連の股旅ものである。

丁か半か、一六勝負の賽の目まかせの青空道中、東海林太郎の甘い主題歌のメロディーが流れて、振分け荷物に長脇差、傾けた三度笠の下は濛い男前、空は青いし、街道はス、キが風にゆれて……こう云つた股旅もの獨特の風物詩である。此の三作とも衣笠貞之助の作品であつた

と思う。

又、此の頃の現代映畫には風俗映畫としての傾向が強かつた。その代表は島津保次郎であり、「嵐の中の處女」(昭和六年?)「隣りの八重ちゃん」(八年)、「その夜の女」(九年)、「家族會議」(十一年)、「朱と緑」「淺草の灯」「婚約三羽鳥」(十二年)「愛より愛へ」「お加代の覺悟」(十三年)等によつて描かれてゐる昭和初頭の類廢的とも云える昭和風俗を充分に現わしてゐる。

「朱と緑」「淺草の灯」に初期の高峰三枝子が見られ、佐分利信が「朱と緑」に脇役で出演してゐるのも楽しい思い出である。又昭和十三年の二作が正月映畫として作られたのであるが、記憶に誤りがなければ前者が何れかの映畫雑誌のベスト・テンに入つてゐたと思つ。これも當時の島津保次郎の良心が、感じられて嬉し

い。同様に昭和風俗の中、當時の小市民生活を描

いた作品に内田吐夢の「裸の町」(不詳)「限りなき前進」(十年)、小津安次郎の「一人息子」(十一年)がある。内田吐夢の二作は描くは同じ庶民生活ではあつたが非常に傾向は異なる。「人生劇場」(十一年)は又違つた傾向を持つてゐる。原作の古風な義理人情の世界が演出者の肉體を通して表現されて豊かな味わいがあつた。多くの異つた傾向を持つ作品、これが吐夢の特性の一つでもある。

小津安次郎の作品には當時のインテリの抱いていたペシミズムの色が濃い。此の傾向は彼の最後の無聲映畫である「大學よいとこ」(十一年)に於て顯著である。

かづした近代人の持つ性格の弱さを描いたものに瀧谷實の「母と子」(十二年)がある。彼

は小津と共に都會的な感覺を持つてゐる。小津の様な小市民的なペシミスティックな考え方を時代劇に持ち込んだのが山中貞雄である。「人情紙風船」(十二年)の深刻さは今でも

忘れ得ないものがある。又此の映畫は當時洋畫専門であつた日比谷劇場で封切られた最初の日本映畫であつたと思う。

昭和初頭の時代的な空氣から生れた主人公として忘れられない二人がある。命まで賭けて働いた主人に捨てられ、あらゆるものへの反抗から乾雲坤龍の刀を求め、こけ猿の壺を狙つて深夜の江戸の巷に妖刀濡れ燕を振る隻手隻眼の怪劍士、丹下左膳である。鋭いカット・バックによつて寫し出される丹下左膳は、伊藤大輔によつて性格づけられたと思うが、左膳の持つ人間性は近代人の持つニヒリズムと遠いものではなかつた。

既に名聲を擧げていたこれまでの演出者に伍して豊田四郎は「若い人」(十一年)を以て新しいスタートを切つた。「若い人」が必ずしも傑作とは思わないが、ラスト等の小倉金彌の撮影の美しさと共に何か心に残る。其の後彼は「泣虫小僧」「冬の宿」「鶯」(十二年)と優れた作品

を出している。夫々、林芙美子、阿部知二、伊藤永之介の原作であり、映畫を文學の高さまで持つて行き、併も文學によりかゝつて卑俗化する事なく、「鶯」の幾つかと挿話を重ねて行く手法も印象に残る。

各々一人の原作によつて優れた二つの作品を有する田坂、清水、の二人がある。田坂具隆は山本有三の原作により「眞實一路」(十二年)「路傍の石」(十三年)に原作の誠實さを表現し、清水宏は坪田譲治原作の「風の子供」(十二年)「子供の四季」(十四年)によつて童心の世界を描いている。

以上はトーキー以後昭和十三年頃までの映畫の中、私の心に残つていたものを演出者の名前と共に羅列したに過ぎない。また外に島津保次郎の「お琴と佐助」(十年)山中貞雄の「大菩薩峠」(〇)五所平之助の「新道」(十二年)熊谷久虎の「蒼氓」(十二年)等書き落した人、作品も少くないが、更めて書き加へ様としない。

要するに私は若い人達に過去の日本映畫に相當優れた作品があつた事をお知らせし、又、機會があつたら一度は見る事をお奨めしたのである。

尙これ以後にも「暖流」。「次郎物語」。「土」。「馬」。「小島の春」。「爆音」。「母子草」。「無法松の一生」。「殘菊物語」。等優秀な作品があるが、見た人も多いであろうし、又、少しでも戦争の影響を受けていると思ひ敢えて觸れない事にした。

私の救主

吉田支店 鹽田 満喜

39
私の母は、とても愛情がこまやかで人一倍子ばんのうであつたから、とても私を愛してくれただが、私の十五歳の時死んでしまつた。母が死んだ爲に、私に色々の悲しみがあるが、私を此等のあらゆる苦しみを悲しみから救つてくれるのはキリスト教である。

私は、十七歳の正月に始めてマタイ傳福音書を讀んでみる。何も讀む本が無いので、そこにあつた小さい薄い本を手にとつて讀んだのが、この福音書である。マタイ傳のキリストの山上の垂訓の「幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん」という所を讀み、よい宗教もあるものだと思つた。このキリストの御言葉は、私を救つてくれる。悲しんでも悪い事はないのだと思つて、心が安らかになり、かえつて明るくなる。そして私は、聖書は、佛教のお経などは違い、よくわかるように書いてある本だと思ふ。終りの方まで残さずよみ、キリストがとらえられて十字架につけられて殺される方になつたら、私はキリストがあまり可哀想で泣き／＼讀んだ。キリストの十字架は、私をして今迄とは違つた目でキリスト教を見させ、キリストの十字架は、私をして他の者には従はなくても、キリストには絶対に従わねばならぬものだというおもいをおこさせた。私は、キリストならば自

40 分を救う力があるだろうと思つた。その私の豫想はあつたつていた。この私と常に共に居て、母の愛のような大きい愛をもて、私を愛し、導き、救つてくれるのはキリスト教である。

私は、十八歳の年の六月頃から聖書を、ひまさらへれば、ひつきりなしに讀んだ。毎日毎晩讀み続ける中に、聖書は讀むだけではならないと分り、聖書に書いてある事を一生懸命私は、努力して行かうになつた。いい加減ではきゝめはないから、熱心にやろうと思ふ。熱心なクリスチャンとなつてから、私は今迄の私ではないようになつた。神によりて生れ變るとはかういふ事を言うのだからか。私はクリスチャンになつてから明るくなつた。それならクリストの御言葉を完全に、よく行ふ事が出来るかと言ふと、決してそうではない。福音書の道徳は高い。福音書の理想にはまだ私は到底及ばないが、少しでもこれに近づく様に努めて居る。私にまだ悪い所のあるのは、聖書がよく行えない證據で

ある。聖書を行ふと、その經驗によつて知つた事がある。それはクリストの御言葉は皆誠であつて、決して偽りはないという事である。だん／＼私は、聖書にある事は皆信じられるようになる。そして聖書の最後の、ヨハネ黙示録に豫言してある事は、必ず將來起る事であると、信じられる。聖書は私の寶である。私は始めてヨハネ黙示録を讀む時、聖書の面白さが分つてきた。私は、何度でも繰返して讀む。私は、よく一人で淋しい時など福音書を讀んだ。いつも神様の有難さが身にしみた。

私はラジオのキリスト教の時間で聞いたが、内村鑑三という人は「私に希望がある。それはイエス・キリストである。私に光がある。それはイエス・キリストである。私に神がある。それはイエス・キリストである。私に宗教がある。それはイエス・キリストである」となんでもかんでもイエス・キリスト、イエス・キリストと言つたそうであるが、私もこれと同じ氣持であ

る。よくこんなによく自分の心を言い表わす事が出来たと、私もこの人に感心する。

聖書によつて、天國の事が判つて來て私はとても、嬉しくてたまらない。聖書を讀む事は私にとつて、最も楽しい事である。どんなにいやになつた時でも、聖書を讀むと、いやな事など少しもなくなり、胸がすーつとして、氣持がよくなる。聖書はアラビヤナイトのような面白いのある本であると思ふ。

41 私はラジオのキリスト教の時間にお話しをして、私に缺けているもの、私の求むるものを與えて下さり、私を氣持よくさせて下さる人々に感謝する。キリスト教の時間を聴くと、今迄離れていた自分の心をキリスト教に呼び戻されるような氣がして、とても嬉しい。キリスト教の時間は私を喜ばせ、楽しませてくれる。私はラジオの放送よりも、この放送が一番好きである。キリスト教の時間は、全く私によい事を教えてくれる。だから、宗教的生活の助けとな

るので私はとても助かる。聖書が忙しくて讀めない時などでも放送なら耳から聴けるのでとてもよい。

神様は私の魂の休息所、私の恩人、私の救主、私の最後の避所、そして天國は私の家で私はキリストと同じ家、私の母と同じ家に住んでいるのだと思ふとよい氣持になる。私は毎日毎日の自分のなすべき事を行おうと思ふ。苦しい時もあるが、キリストは一番大きい苦しみをたえ忍んだから、それより小さい苦しみを自分にも忍べない事はないと思ふ。本當に内村鑑三という人の言う通り、キリストの十字架は成功である。神があればどんな苦しみも忍ぶ事が出来る。人間が神を失う時が危い時である。私は神様のお蔭で安心する事が出来る。どんな苦しい事があつても、キリストが來て救つてくれるという事を信する事によつて私は喜びで一ぱいとなる。キリスト教のあるおかげで、私に神のあるおかげで私は、銀行でも家でも楽しく、仕事をす

る時間はとても楽しい。キリスト教のお蔭で人らしい人になれるのだと思ひ、どんな事があつてもキリスト教だけは、生涯貫かねばならぬと思ふ。母の死によつて失つたものを私は神によつて回復する事が出来る。そして勇氣が出てくる。信仰が深まれば深まる程、知識が増せば増す程、私は幸福になる。私はキリストの爲に人を愛さうと思ふ。信仰があればとても力強い氣がする。私は神様の力の偉大さに驚歎せざるを得ないのである。私はその神への感涙にむせびたいような思ひである。キリスト教程大きな愛のある、偉大な力のある教は他にない。私は此の世のすべての人がクリスチャンになつて、神を愛し、人を愛するようになつて戦争などが起らなくなればよいと思ふ。

神は知る人に隠れた所をも

神のみたまふ事を嬉しき

Essay

船壁支店

A

子

日常よく皆になじまれていた言葉の中に romantic という語がある。あらゆる所に出てくる言葉、しかしこの言葉は多くの意味を持つていて思ふ。たゞ單に我々はその語を普通夢想又はおよそ現實にほど遠い通俗的な社會とはかけ離れた或る一つの世界を意味させる様な、空想的とか幻想という様に解して得々として通用させてしまつていく人がかなりいるのではないかと思つてゐる。これと言つて深くつきつめた事もなく……。他の人もそれで何の解釋もなく納得し來つた言葉である。私もその様に同様の道を坦々と歩んで來てしまつた。しかし、今日ではつきつめて、もつと外の考え様から推して新たにこの意味をすげなく考え合せてみたいと思ふ。

私の讀んだ浪漫主義という本の中に romantic はもと古フランス語の roman から出た。その一層古くは romans 或は roman であつて、すべて中世ラテン語の副詞 romances に源を發している。roman 及びその類語はラテン語の轉訛よめ生じた諸種の方言を意味するものであつたが、やがてそれらの方言をもつてかかれた物語に適用せらるゝに至つた。そしてかかる物語が多くの中世騎士等の冒險的武勇傳であり荒唐無稽であつた所から従つて romantic は奇異な、驚異すべき、思ひがけぬ、極端な、類のないという様な意味に用いらるゝに至つた。好い意味に於いてしかも、自然の風景の或る特色を表わす。又、異常な事件、奇異な物に對して言われるとたしかに記してあつた様に記憶している。

これまでに深い意味のある語を單に記した様な稀薄な意味に解していた我々がなすべきなくも味けなく感じた事はなかつた。こゝでは、

romantic をのみ記したが、この言葉のみでなく外にも數多くある中に我々の氣づかない深い意味があるのでないかと考えさせられた。

この様に言葉の由來等、又々研究すれば限りはないが言葉の意義を吟味してこそ、いくらかでも今後、使う場合にも考えさせられる糧にもなるのではないかと思ふ。そういう深い所を味わつてこそ、その多少なりとも通俗的雰圍氣の中に凡そ表し難い藝術的觀賞又は、我々宇宙の秘奥に徹到せんとする止み難い憧憬の心隨に、より高い何ものかを求めて止まない人々にその人々をして藝術的な魂の中にとけこませる感も味わう事が出来る様になるのではないかと感じさせられた。何事についてもこの言葉のみにかざらず、この様に深く考察すれば今迄何とはなしに過して來てしまつた尋常にも、色々納得させられる所が多く、又平凡である生活にもいくらかでも明るく向上しつゝ開拓して行けるのではないかと思ひ私はこの言葉を通じて、皆の反

44 省を促したと思いまもらない文をこの上に記
するに至つたのである。

無關心

企畫課 橋本市郎

吾々の「銀嶺」が新しく生れる。その投稿に
就いて一言

そもく今迄の「ニュース」への投稿者は餘
りにも少くその穴を埋めて居つたのが、書記長
の文才であり努力であつた。こゝに吾々の無關
心さが遺憾なく暴露せられて居る。

これは一組合に關してのみではない。經營に
ついて政治について人によつて異なるかも知れぬ
が、多くの人は小さく自分自身の平和にのみこ
だわつて積極的行動を好まぬ。面倒なことから
は遠ざかろう。安きにつこうと願う人の心の姿
であろうか、特に吾々銀行員は、より消極的
に、事勿れ主義的平和を多分に信奉する傾向に

ある。

吾々の政治に對する無關心の結果が敗戦であ
り、そして今日の悲惨なる現實である。經營に
對する従業員の關心薄くしてどうして事業の發
展があり得よう。まして經營は吾々の經濟生活
と不離一體の關係にある。吾々がより豊かな經
濟生活を送らうとするならば、仕事に對する熱
經營についての關心となつて現われねばなら
ぬ。組合の正常なる發展でなければならぬ。ま
して組合は組合員の組合である。如何に執行部
が活潑に運動しようとも一般組合員の盛り上る
力なくしてその發展はあり得ない。

現在の空氣は遺憾ながら執行部と一般組合員
が一本であるとは云い難い。組合員が無關心で
あつては、さぞ幹部は誰の爲にいそがしいそし
て憎まれ役のおそらくはやりたくもないだろう
組合役員に、だすさわつて居るか戸まどうこと
があるかも知れない。これでは役員に濟まな
い。又これが世に云う組合貴族を作る原因でも

ある。

また給與問題その他願調に解決して居る間は
問題はない。一度行きすまりを生じた時は、今
迄無關心であり非協力的だつた組合員も敢然と
して「組合弱し！ 組合何しとる！」と口角泡
を飛ばして組合員としての權利を主張するに違
いない。吾々は權利を主張する前に義務の履行
を忘れてはならぬ。
「ニュース」への投稿少きからわかり切つたこ
とを述べて來たが「銀嶺」は眞に吾々の機關誌
たらしめたい。



詩

潮うしほ



審査課 涼 子

今日も待ちつくした
 紅色の海の薫り
 更紗模様の絨氈は白い砂に郷愁をひろげ
 繰返された旋律に
 私のふるさとを訪れる
 灰色の水平線に南風は通い
 おしよせる潮の上の鷗の群れに
 塵埃で蔽はれた
 私の日記帳は甦へる
 黄昏の渚に残した
 私の足跡は悲しみは
 暗い世界にも住み馴れたなつかしい潮の
 白日の朝のひとよきにさしあげる
 私のはかないはなむけであつた

たゞ一つの灯になろう

審査課 涼 子

たゞ一つの灯になろう
 小さな自負と小さな虚榮と
 小さな智恵と小さな野望と
 それら一さいをふりすて、
 あなたの心の中の
 たゞ一つの灯になろう
 優しき人よ
 まこともて
 たゞ一つの灯をまもり
 たゞ一つの灯を消すことなかれ
 透明にしてつきざるもの
 あたゝかくしてきらめくもの
 あなたのこゝろの中に
 ほのぼのともえる
 たゞ一つの灯になろう

旅

審査課 涼 子

脚にまかせ こゝろも軽く
 私は大道を自由に旅する
 もはや制約や空想的は境界線から放れて
 私は私を捕えんとする凡ての形式から
 私自身を奪い返すのだ
 依態の知れない沈黙した大地を歩み
 水路もない荒海を航海するのだ
 如何に安全なる港であつても如何に穏やかな
 水であろうともそこに私は碇を下してはなら
 ないのだ

さあ 行こう

私は一時もそこに停つてはゐられないのだ
 旅する魂は絶え間なく高きものへ最上のもの
 へ歩み寄ろうとするのだ
 そこには言ひつくせぬ程美しい
 神聖なものがあるのだらう
 人はゆく
 偉大なものを求めて 永劫の限り
 そして
 肉體を離れた魂の旅は
 宇宙のある限り前進するのだ
 さあ！
 互ひに手をとつて
 健全な力と自由 大地と共に
 旅をつゞけよう

信念

蓮田支店

實

薄暮

大宮支店 桂

秋

俺と云ふ人間は 何んの爲に
 此の世の中に生れて来たのだらう
 果して 生きて居て
 有益な存在なのであろうか
 果して あゝ 果して……
 寝る 起る 喰ふ それでは
 禽獸と何等變る處はない
 然し乍ら俺には思想がある
 果して あゝ 何處に……
 そして 精神がある
 此の思想 精神と云ふものを
 有効に使つたなら——
 眠りの床より呼び覺し自分のものとして
 しつかり ひつつかんだなら——
 そして 其の魂を吹き込んだ
 思想と精神とを俺の信念への道へ
 結集して行つたら——

あゝ 幾らか……

幾らか明るくなつた様だ

冬空のまんなかに
 ほつかりとういた一きれの雲
 陽はくれかゝつた
 風にすてられて
 スピードを失つた君は
 ゆきつくところもないとみえて
 ぼんやり考へこんでいる
 何故君は舗道の白さにみとれているんだ
 荷車の牛も急いでいるじやないか
 めのまへにそびえたつあの山を
 君はどうして越えるきなんだ

裸木

大宮支店

桂

秋

ある詩人

大宮支店 桂

秋

吹きすさぶ風の行方に
 へう／＼と命をまわせ
 地におちた季節のうろこ
 鈍色のちまたの道に
 さむ／＼と膚を凍らせ
 増列した裸の御路樹
 つかれきつた私の瞳には
 一夜のあらしの
 あまりにも烈しい力の軌跡
 あつ しかし私の季感には
 ホラ 聞えるよ
 春のかすかな息吹が！

つかれきつた

骨と皮ばかりの詩人が

今日も又苦惱の生活から

そつとのがれで

若草の上でため息を吐く

青い松林の中にまどろんで

じつと空をみつめて

心にうけた痛手を

しづかにいやしている

再生への道

爲替總括課 K・S 生

焼けた大地に立ちて
敗北に眠る街をみる
寒空に街を横行する浮浪兒
くはへ煙草の闇の女
これらは誰の犠牲であらうか

街を走るジープ
澗歩する進駐兵
高いビルに飄る異國の旗は
何のシンボルであらうか

しかし 我々は今
このせまき心 せまき土壌より
眞の平和 新生日本を
生みだすのだ

流れ

爲替總括課 K・S 生

縁に圍まれた初春の空気を通して
音も清らかに流れる谷川
私は岸邊の岩に腰を下して
せらぎにとけてゆく
夢の樂園へ導かれた様に

流れは大岩に碎け
渦をまきつゝ 過去をふり返らない
それは人の道を畫くが如く
或るものは大道に 或るものは小道に
酔へる波 激情の波立

あらはれる谷川の岩を
ぼんやりとながめる
飛沫の中に浮ぶ君のイメージ
私は深海の孤獨を憫む
流れと共に 誠實を默示しながら
沈むのを待つてゐるのだ

おもかげ

本店營業部 一 路

幻を追ふ日々
明日の花園を想つて
今——をそつと抱く
愛しみの限りに生きる
人の果て——
哀しきものよ
人のいとなみ
疲れはてた心に
描くは只……おもかげ……

中原の星

飯能支店 S・B 生

星は中原の上空に無限の光を放つ
その星の下に 友はいのちを捧げた
永遠に歸らぬ旅路へと
あゝ 君よ
若き學究の徒 根本浩
希望と眞理に輝いてゐた君の瞳
不純なかげを持たぬ
さわやかなアクセント
共に歩み 共に語りし
北京 清華の杜
音楽堂の横の草原に横はり
語る君の強き語調

そは失はれた青春への抗議に非ず
生に徹した高邁な思想であつた

煙草とコーヒーと音楽の好きだつた君
北京 王府井の茶房で

ペードーベンの「第五」をきいた時
君の瞳に涙の光つてゐるのを私は見た

それから幾月

君は大行山脈の前線へ

私は はるか南済南の飛行場基地へ

別離の日

「又逢どう」

君の笑顔には

生きて再び逢えぬ決意が浮んでゐた

君の死を知つた夜

私は中原の天空に光る星に

君の姿を見た
私の頬を止めなく熱きものが流れた

魂の底から信じ合つた君と私
そして誓ひ合つた

あの北京 清華園の美しい杜

同じ若い世代を生きた君と私
君は志半ばにして死を選んだ
戦に敗れ 祖國へ歸つた私は
今混濁した世に生くる

何日かの日

君の靈前に

輝ける我が言葉を告げること誓ひて

今日も又 私は前進する

榮光の日 いつか訪れん

逝ける母

爲替挿話 K・S 生

薄暗い雲 流れるて

病院の窓より 見る空も

何かさびしい 午後の日よ

日益しに瘠せる 母の身は

枯木の如き せつなさよ

私の爲に永き年

それは見るにしのびない

尊い姿 明日よりは

この世にみられぬ さみしさよ

闇をつらぬく 汽笛の音に

息なき母に 寄りそひぬ

暗い電氣も この世をば

母の最後を 語るやう

ふと氣がつくと 雨たれば

静かな闇を ひどかしの

鼓動の音も 力なく

母はこの世を 去り行きし

「許して下さい お母さん」

永き我儘 知りつゝも

思ひ残るは 吾が心

春

春 子

聞いてはならぬものを聞き

見てはならぬものを見てしまった

然し それでいゝと思ふ

來るべき時が來てしまつたのだ

これが眞實の姿なんだ

眞實の姿は尊い

此の輕薄な世の欺きの背後で何か無氣味な程
の眞實を持つて何時も嚴然と佇つているもの
それは「事實だ」。

そして「こんな冷やかなものはないけれど」

又こんな頼りになるものはない
知らなかつたものを知つて愕然とはした
が

その驚愕にこそ光がある
「驚き」によつて人は一歩前進するのだ
そして又

次に来るものを擬つと見つめるのだ
底を流れるもの、そしてもつと もつと
その底を流れるもの……

真理は

我等の母體に充滿し

我等は

宇宙へ發展する

そこに哲學があり 藝術があり

宗教がある

冬

深々と澄む蒼い空に
うつすりと白雲が流れ
おだやかな冬のひる時

寄るべなき獨り身なれど
この淨らかな自然の中に
生きるその歡び――

幸ひ薄き運命なれど

貧しい吾が心なれど

かくも麗しき大空の

眼にしみるその青さ たのしさ

深々と澄む蒼い空に

うつすりと白雲が流れ――

何をか書けとペンを執れど

唯その自然の恩恵に

ありがたく淋しく

涙ながしぬ

冬の夕暮

羽生支店 田原 富美

悲しい陽が暮れた

たそがれがいつばいに迫つて来る

なつかしい人の面影

それを抱きながら

とぼ／＼と長い影をふんで

線路徑を行く

ゴウ／＼と 下りの列車が去つて行つた

激しく涙をふりはらつて!

星がたつた一つ

さびしい追憶の夢のやうに

さゝやきかけて居たが……

獨り旅

北本宿支店 横田 淑子

別れ来て

一人窓邊の 汽車のたび

梅や林や松の森
無名の花咲く 丘越えて

ふりむき／＼ 進み行く

かなしかりけり 汽車のたび

また逢ふ日をば 想ひつゝ

さよなら／＼ お元氣で

私の欲しいもの

私の欲しいもの

それは

美しい人でもない

あり餘る程の

財産でもないければ

名利でもない

かざり氣のない

人の心の

大いなる眞の愛情

そして何時までも

どんな時でも

變りない

人間の愛情



吉田支店 はるみ

朝さめて 枕にひびく せらぎを

眼とちて しばし 聞きつゝぞいる

提出の書類 かきおえて 冬の日の

暮るゝ 出峽に みぞれ降りくる

出勤の途で 出合し かの乙女

あかるき笑顔 今朝も美し

亡き甥の 喜び持ちしかの玩具

又目にふれて 我涙ぐむ

人だから 何かと見れば美しき

花嫁さんの、パスを待ちおり

吉田支店 かほる

つつがなく 勤終りし 今日もまた

銀嶺はるか 我を迎へる

心なき 候補者共よ 道標に

宣傳ビラを 今日よりはり行く

凍てつきし 夜勤歸りの町角に

あわれ狂女の 歌聲を聞く

村山支店 三

茶

見はるかな武蔵野の雲披き出し

富士の高嶺に雪降りにつける

一日の仕事を終へて安らげに

いとほしく見る白梅の花

世話になりし友嫁ぐ身と定まりて

幸を祈りつゝ別れを告げん

昇りゆく預金の數にますくと

十一人の團結強む

長々と粘りし果てが一口の

七福に吾才なきを思ふ

本店營業部 須田 朋子

にぎほしく 祝ひの客のさめめきて

くりやの灯今宵明るき

生きたるも若きも嬉し白波に

石を投げたり春の砂原

酒のめば常は頼もしと見る人の

寂しと泣きぬ 海見ゆる町

乙女らの明るき笑ひ 過ぎゆきし

若き日想ひ悲しみてきく

明き灯に交りてゆけぬわびしさを

胸に抱きて星と語りぬ

うぐひすの羽風に一片散りかけて

花靜かなり晝の紅梅

朝露にしとゞぬれたる黒土に

麥の芽生えのみどり美はし

白梅

大宮北支店 紫

峰

一人してものかき居れば庭前に

ほのかにぞ匂ふ白梅の花

白梅をあかずながめる一人居の

このしづけさもうれしと思ふ

ゆるやかに柱時計は鳴りいでぬ

わがへやぬちの午後の冬の陽

花に寄せて

飯館支店 荒井喜代子

めず人の歸り來まさず庭に咲く
山茶花やがて散り果つるかも

いしすえとなりたる人に見せばやな
うらゝに咲けるこの櫻花

梅生ける心は明く靜かなり
辛きに堪えて春を待たなん

秋深みさびしき増しぬこの日頃
秋海棠のうつむきて咲く

くる日々を如何に生きなん亂れたる
苦しきことの多きこの世に

我が心の悩み

大宮西支店 S・T 生

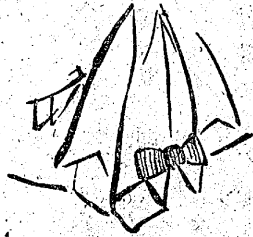
移り行く我が心をば省みて
亂れしペンを常に運ばん

時たまに思出しては開けて見る
友の寫眞の常に笑めるも

とばくと日暮の路を急ぎ行く
心淋しき犬の遠吠



句 俳



冬より春へ

本部 星野 茅村

犬を離れて猫を抱きぬ實雨天
枯蔓の網縦横に崖の畫
冬の夜の我がのる汽車の笛遠し
死に誘はる人と眺めぬ寒椿
椿紅し人焼くことに關はれば
露の露とる指のみの生きてあり
土の精がさゝぐる玉の露の露
小鳥追ふ犬おろかなり露の露

智能線長き掌にうけ露の露
春潮に顔ゆがめ鷗釣る六年

本店營業部 京

子

短日や小女が走る影の中
春泥やわが影越しぬ窓明り
蘆芽ふく水に沈める古樓かげ
水平穩白き道ゆく蘆のかげ
土蜘蛛の水あし走る樓の雨

爐 火

羽村支店 横田 丘花

持てなしの爐火を両手に抱くこと
爐話に雪となりたる庭明り
爐話のとぎれくぐに柵の音
憂きことの去らぬ爐の火の衰へし
幸福をラジオに泣いて爐邊の妻

三月の風

川口支店 星野 紗一

三月の風圓柱に寄り圓柱を離れ
石塊の如く三月の階降りて行く
三月の雑木林天才が繪をかくしめる
三月の風ある納屋に水筒さがす
彼の水筒三月の風にろゝんと鳴る

吉田支店 かほる

小鳥鳴く深山の地蔵こけむして
霧去りて聞ゆるモズの聲近く
ほゝ赤く子等は麥ふむ日曜日
勧誘に歩く道すじ梅の花



武田 魯牛

お供へ鼠が出てる原稿紙
断つた後の空虚へ縫ひつゞけ
異動期へ社員過敏な耳を持ち

市川 白舎

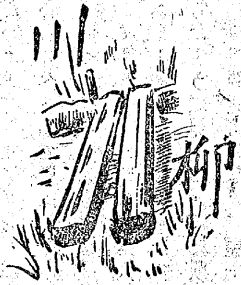
算盤を包んで助勤二人来る
インフレの風が吹き込む膝の穴
子供から順に起き出る日曜日

川上 秋青子

親展の封書くまなく糊をつけ
大掃除時計は庭の隅で鳴り
留守番と決めて四月の日曜日

熊本 茶暮天

ポケットを切られて掏摸の腕を褒め
頼まれて仲人もする支店長
驚の初音庭掃く手をしばし



川柳「芋の花會」句集

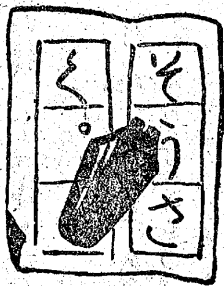
小川 不句字

意見する身も覚えある春の宵
鶯が来る庭もなく朝を掃き
銀行へ上ればお茶が一杯出

原田 壽南史

いゝ辭令顔のしまりがつかず居る
いゝ辭令玄關からの聲となり
いゝ辭令獨りになるとまたひろげ

熊本 茶暮天



川柳風景

「青春の夢」

本部 茶 暮 天

(一)

重いオーバをスプリングに變えた今朝は、身も心も仲々として思はず口笛さへ吹いてしまつて、いつもの出勤どきの憂鬱をすっかり吹き飛ばして驛へ急ぐ。驛の櫻も思ひなしか、急に蕾をふくらませ、枯枝の梢に紅色が一と際濃さを増したように見える。事務所へ着くと早いのでまた誰も見えていない。屋上へ出て見ると、春

霞の彼方には秩父連山が朝の太陽を眞向きに受けて、思いの外近くに見える。まだ雪を中腹まで被つている富士が、紫一色の連山からくつきりと浮び出でて輝くばかりの美しさ氣高さを誇つてゐる。この風景の中にしばし解け込んでみると、沁々と春の氣を感じて、何か旅に出て見たい衝動が湧いて来る。新緑の山歩きには忘られない誘惑の數々。緑したる高原で胸一杯に吸い込む清澄な空氣を思つたゞけでも心が踊る。

溪流の音を枕にハイクに疲れた身を温泉の中に浮き上らせて無念無想のそのひととき。パチパチと燃え盛る粗菜火を圍んで、素朴な山家の爺さんから妙なアクセントの自慢話を聞く面白さ。あの山、あの河、あゝ春だ、春だ、想い出に残る嬉しい旅がしてみたい。

屋上は旅情をそよる春の風

(二)

「妾もう銀行辭めようかと思うの。足掛六年で

すもの。随分長いでしょう。」

「そうね。お互によく辛抱出来たわね。妾も御同様、そろ／＼辭めないと賣れ残りになりそうですわね」

「あら、では妾が嫁き後れみたいね」

「御免なさい、貴女にそんな意味で言つたのではないのよ」

「でも本當ね、知らぬ間に歳ばかりとつてしまつて、何となく心細いわね」

「妾、昨夜變な夢を見たのよ。夢の中では、もう結婚していたのよ」

「まあ、相手は誰？ 商人勤め人、それとも閨屋？」

「いゝえ、それがねとても面白いの。六年間銀行生活の習慣が夢の中にまで出るのですもの。」「それで？」

63 「相手は解らないけれど銀行の人と家庭持つたの。毎日銀行の様子を夫が何もかも話して呉れるの」

「だけど今時サラリーマンは辛いでしょう。新婚早々の赤字どうして？ 節生活と言つても新家庭には賣るものはないでしょうし」

「まあ貴女は現實的ね。インフレそんなに何時迄続くかしら」

「で貴女の夢のつゞきは？」

「お夕飯のあと、妾が聞いたの、お店の成績この頃どうつて、すると夫が言うの『うん益々好調だよ。毎日百萬圓も預金増加だからね。この分ではインフレ恐るゝに足らずだよ。それにね、今度のはがらか預金の募集は僕の店が一等賞さ。賞金貰つたらお前に着物位買つてやれるよ』だつてさ。素的な夢でしょう」

「わアーそれ、どうやら正夢ではなくつて。もうその先、澤山々々、無條件降伏よ」

銀行へ希望をつなぐ嫁の口

(三)

ニコリと微笑してさあどうぞと言はぬばかりに片手を踊るように差上げて洋服屋の飾窓の

人形はフレッシュな春のモードを誇らかに通行人に無言のウインクを送っている。

若向きのうすいコバルト色のワンピース。生地は肌ざわりも柔かそうなギャバアジン。

微塵の隙もないすつきりした仕立上りは、流行のロマンチズムの風潮を見せてふんわりと袖元を浮かせた繊細なタツチとするどい感覚を匂はせた大膽なデザイン。

二十歳を一つ二つの娘がさつきから硝子に顔をすりつけて咳いている。まあ何で素的なワンピース。あんなにスマートには着こなせないかも知れないけれど、あの服を着て見たらどんな気持がするかしら。まごとみんな羨しそうに振り返つて見るわ。いつも縫い直しばかり着ているんだもの、一着位のニユースタイル贅澤とは言えない。だけど値段いくらかしら。正札に小さく讀める数字は金八千圓)まあ八千圓? 少しく高過ぎるわ、でもお母さんに話したら半分位出して下さるかも知れない。でも逆も言い出せない。

い。妾の働きでは? ポーナス入れても一ヶ年かゝる。映畫も蜜豆も返上して……。まるで夢みたいな金額。だれど欲しいわ。諦め切れないわ。

溜息のひとよ曇る飾り窓

(四)

洗練されたお化粧は日に日に彼女を美しくして行く。今日のこと念入りと見えて僕の前の机に座つた姿は匂うばかりに若く明るく、そして新鮮そのものである。何處かに哀愁をたゞえたる瞳、理智に輝く額の邊り。オヤ? その額の右寄りにボツチリと赤く青春の華? 僕は氣付いて何か言つてやりたいがうまい言葉とチャンスがない。黙つて見ていると彼女も氣になると見えて汗を拭く振りをしては時折、手をハンゲチを觸れている。

とドアが開いてKさんが這入つて来た。彼も美しい娘の顔には敏感であるらしい。ニヤリと笑つて何を言い出すかと思つたら、

「T子さん出来たね〜」

「?.....」

「大事なおでこに、オモワレニキビ.....」

「あらっ! いやっ!」

と周章で額に手をやつて隠してしまふ。

「ひと晩でなほる方法教えてやろうか」

「本當にあるの」

「あるさ〜」

「なあーに、教えてよ」

「あのね、それは其處へ戀人にキッスして貰いなさい。ワハツハツ.....」

と高突いして消えてしまつた。彼女と僕は思はず赤くなりお互の顔見合せての微笑。

青春の悩みニキビが一つ出来

(五)

65
初めて貴女と觀た「心の旅路」がこんなにも愉しく豊かな愛情に満ちた優秀な映畫だつたことは、二人の未來に何か明るい希望を齎す前兆の様な氣がして心も浮々と家に歸つてからも貴

女の顔とグリーンガースンの顔とが、フラッシュユバックとなつて、私の脳裡にいつまでも明滅していて仲々消え去りませんでした。この感激を私一人で秘めて置くのは何か物足りぬ氣がしてこのペンを執つてみました。

貴女にはあのラストシーンの迫力は如何でしたでしょう。

「桃の花が咲き亂れている。彼は鍵を鍵穴に差した。扉が開いて、心の扉も長い喪失状態から蘇生した。『スミシイ』と呼ぶ聲、ふり返ると泣き笑いしている女が立っている。

「オ、ボーラー!」と喜び溢るゝ温い愛の擁、その一瞬、洶然と見惚れていた私は、彼女の胸のときめきがひびくように感じました。あのように慇々と胸を打つ香り高き甘さ。觀る人の心を陶醉させる雰圍氣。もう言うところはありませんね。また、キティという純真な娘が結婚式前日、男の空虚な瞳を見て、愛する女の敏感さから自分の戀を諦めるところがありました

ね。あの娘心ですが果してあの場合あんなにあつさりと思ひ切る事が出来るものでしょうか。戀愛の花咲く明日を控えて情熱のクライマックスの最中でも、決して現性まで忘却させないアメリカ娘の、しつかりと、身につけている教養の高さがはつきり汲み取れるではありませんか。でもキティ位の、聰明さが日本の近代娘にも有つても良いのではないのでしょうか。貴女の御感想をお待ちしています。

良し映畫心の底に残るもの

たなばたや

本部突拍子

「何んと云つても、食糧増産ですからなア」それに時々、お爺さんの配給は、少ないんですよ、なんて、極附けられるには、閉口しますよ」土に親しんだり、口を助けたり、一舉兩得ですからな」こんなわけで、作藏爺さんと多平さんは、

境の竹垣を挟んで、評議一決すると、互に小さな空地を、所構はず掘り返し始めた。先祖代々、安住の地と極めていた。みゝすが、周章て出したのも無理はない。

「肥料は何か良いでしょうか。」堆肥を鋤込めばいいそうですよ」「ダイヒですか。何處に賣つてゐるんです……」「なに枯草や野菜の腐つたので充分ですよ」そこで今度は、二人共芥溜を漁り出した。ラジオがジャガ芋の植付時だと言えばジャガ芋を活込み、大根の蒔き時だと知らせると大根の種子を蒔いた。

『しくじつた菜園だナと蝶も知り』大根には花を咲かせ、葉つばばかりのジャガ芋が出来た。こんな管ではないがと、あわて、新聞や人の話を聞きかじりながら、それでも半年、一年と経つ中に、どうやら畑らしくなつて来た。陽氣の加減で、カボチャがぶら下りでも、しようものなら近所中へ布令廻つた。

初めの中は「うちの鋏をお使いなさい」とか

「種子を分けてあげましょう」とか至極圓滿だつた二人が、段々に競争を始め出した。熱中して来ると「あのさまはなんだ」「あんなことをして、何が出来るもんか」蔭口を敵くようになつた。

67

或る朝、作藏爺さんが畑を見廻ると、多平さんのカボチャの蔓が越境していた。憤慨した爺さんが持つていた鋏でチョコキンとやつて了つた。遂に直接行動だ。無断で切りやがつて……と、多平さんが激昂して、蒔き残りの種を一掴み、作藏爺さんの畑へ投げつけて引揚げた。爺さんも氣付かなかつたが、柔らかな大地に抱かれた種子は正直だつた。二三日降り続いた雨が上つて、畑の手入れに出掛けた、作藏爺さんがヒョイと見て吃驚した。何か知らないが、畑一面にゾク／＼芽を出している。堆肥に、種子が混つていたのかな、と傾しげた小首を持ち上げて、隣の畑を見て驚いた。多平の畑に、同じ植物が同じ大きさで、行儀よく並んでいる。やり

やアがつたな」と爺さんブンブン怒つた。

女は女同士。爺さん達の喧嘩なんかに関つてはいなかつた。二人がせつせと作つてゐる野菜を奥さん達は、こつそり持ち出して、裏口で遣つたり、貰つたりして親交を温めていた。その物々交換が、一度暴露しかけたことがあつた。

髭顔に頬冠りして、作藏爺さんと、睨み合ひながら、多平さんが畑いぢりに、餘念がなかつた時、出拔けに「お父さんお八ツですよ」と、娘の君子さんに聲を掛けられて、「ウン、サツマ芋か、珍らしいな……」泥だらけの手を、ズボンに搾り附けてから、受取つた芋を一口嚙つて、多平さんは眉を纏めた。「何んだ、こんなジャガ芋みたいなもの、どうしたんだ」「あら、そんな大きな聲をして……。お隣りで頂いたのよ」君子さんはウツカリ喋つて了つた。

しらばつくれた、二人の様子を覗つていた作藏爺さんの耳に、この話が感電しない譯はなかつた。爺さんはウンと唸つた。早速勝手口へ首

を突込むと「多平の所へサツマを遣つたのか」と急込んで訊いた。奥さんはハツとして庖丁の手を休め「どなたが、そんな事を言いました？」と反問した。「今多平の娘が言つていた」と爺さんは氣色ばんだ。「フン、誰れがお隣りなんかに物をやるもんですか」奥さんは馬鹿々々しいと云つた顔付で爺さんをやり込めた。爺さんの抗議も鎧袖一觸だ。女は芝居が上手である。「……そうだろう。多平の娘も食えないな」と呟きながら又畑へ引返して行つた。奥さんはやれ／＼と思つた。

玉公とミ一に至つては、人間共のいざこざなど更に無關心だ。垣根を潜つて公然と交際しているし、爺さんのよし子ちゃんも、多平さんとの巴ちやんは、小學三年の同級生で、親の唾合いなにか、北極のボヤ位にしか感じていないらしい。唯、作藏爺さんの總領息子、私立大學生の、幸一君と君子さんだけは、流石に教養もあり、如何に自由主義の時代でも、簡単に交際

もならず、しばし待期の姿勢を保つていた。

時あたかも、學期試験が終り、暑中休暇がやつて来たが、胃弱の幸一君はアルバイトも出来ず、毎日退屈の日が続いていた。毎日がのびきつた古ゴムのように綿々としていた。その日も相變らず蒸し熱く、庭の松には油蟬が鬱陶しく啼いていた。幸一君が、例により、座敷の真中に寝そべつて、所在なげに、雑誌の頁を繰つていと北側の廊下の所へ、よし子ちゃんが、巴ちやんと二人で葉のついた竹を持ち込んで来た。枝が風鈴に觸れるとチリチリとなつた。幸一君は「あ、七夕だな」と、幼年時代を回想して懐かしがった。小さな机の上には赤や青の色紙が置いてあつた。「よし子、兄さんも手傳つてやるう。」「え、お願いするわ。」よし子ちゃんは、ませた口をきいた。幸一君が起き上つて、退屈凌ぎに、墨をすつて、赤い紙に何やら横文字を書き出した。「兄さん、出鱈目を書いちゃ駄目よ」傍で覗いていたよし子ちゃんが詰るように

言つた。「ウン、これが。英語の七夕やだ」と幸一君が眞面目くさつて、つぶやいた。「そう……よし子ちゃんは感心して」そのくらい、あたいにも書ける」と幸一君の書いたのを手本に一枚書いて見た。「ウン、中々うまいぞ」と幸一君が譽めると、巴ちやんが「あたしにも書かせてね」と今度は二人で書き出した。子供は純真である。色とりどりの五十枚近く全部に、英語の「七夕や」を書いて了つた。

「七夕様は英語讀めるかしら……」と氣にしながら竹の枝に結び終ると、幸一君に垣根の傍へ立て、貰つた。

夜露に濡れて、竹から離れた幾枚か、多平さんの地面に散らばつた。

翌朝多平さんが見付けて、「何んだ、こんなに、散らかしやアがつて。おや生意氣に横文字なんか書きやアがつて……」多平さんは、町會議員だが横文字は苦手だつた。

多平さんの聲を聞き付けて、君子さんが出て

来た。そして一枚を取り上げると「まあ」と言つて顔を踏らめて了つた。別の一枚を拾い上げても同じことが書いてあつた。赤、青、黄色どれを見ても、ローマ字で「KIMIKOSAN」と書いてあつたのだ。「姉ちゃん、わかる？」巴ちやんが何時の間にやら傍へ来て、君子さんを見上げていた。

君子さんが、どきまぎしていると、「お隣の幸一さんに教はつたの。英語で「七夕や」と云うんですつて。私も手傳つて書いて上げたの」と巴ちやんは頗る得意だ。

丁度その時、やつと起き出した幸一君がヒョッコリ、二階から下を見下すと、君子さんの視線とから合つて了つた。「幸一さんの意地悪る！ 覺えていらつしやい」と云う甘美な視線だ。

幸一君は、狼狽して地球が大きく上下動をするような錯覺に襲はれた。それでも、何かぞくと身にしみる喜びを感じた。

東の空には、太陽が、今日も熱いぞと、威嚇するように、眞赤な顔を出した。

T君の急死

川口支店 大沼 満

僕の敬愛する親友T君の訃報が齎せられたのは、小生の記憶に誤りがなければ一昨年（初夏）五月上旬だった。

然し乍ら死なんて生ある人間の必然的な結果であるから記憶力の鈍重な僕にとつては路傍の石の風化して一片の土壌となるが如く、或る過去の事實となつたかも知れないが僕の生涯の伴侶とも云うべき彼の死は確かに青天の霹靂であつた。

三木清氏の友情の論理でもあるまいが、T君と僕とは全くの敵對者でもあり戀人同志でもあつた。深遠な独自の主張を武器とする彼とパツシヨ

ンを唯一の武器となす僕とは全ての部門の闘争に於て彼と論争した。

然し乍ら彼と小生との親密な友愛は彼の肉體を浸透した病に依つて、T君の出講が跡絶え勝ちになつた頃からだった。

それでも、今日彼を定義するのに困難な僕は「馬鹿か天才なり。」との極めて観念的な言葉で逃げることの了解を求めて止まない。

戦争に因る勞働力の不足から生ずる結果を必然的に我々に求めた學徒動員に依つてT君は青春のはけ口を或る一方面（僕も始めはそれが何たるかを決定する事は困難だった）に轉向する事を餘儀なくされたらしい。

彼は、我々青年にあり勝ちな討論に充たされぬ欲望を求めている間に着々と彼独自の到達點を求めて學んでいたのだろう。

T君は常に我々の會合よりは除け者だった。勿論三つ年上の彼に年齢のハンディキャップはあつただろうが當時の我々には神秘のベール

に包まれていたソクラテス（主として彼が問答法に秀でてたかも知れないが）のニツクネームがそれを端的に物語つていた。

然し乍らT君も僕の何處が良いのか歸路の道すがら私をして年長者の彼にある種の敬愛と生意氣盛りの年頃の彼が兄さん振りを僕に見せるその到着點が偶然に合致した譯でもあるまいが良く彼とは話し合つた。

或は又彼と僕との家庭内での存在が同じく長男の位置にあることに依つても決定づけられたのかも知れなかつた。

然し乍ら歸路々々の話題が常に「死とは何ぞや」との我々の年頃にあり勝ちな神秘的なものを、探究せねばならぬ話題になるのは閉口した。勿論理論闘争（少くともそう呼びたい）に自負を持つ年頃だったから今から思えば駄辯としか思えない事も歸路の電車を幾臺も見過す迄になつていた。

然し「我々は如何に生くべきか」なるテーマ

に日々煩悶していた私だったから今から思えば氣の毒な位彼に食つてかゝつた。

僕は彼に良く云つた。僕にとつて死なんて殊更に云々すべき問題ぢやないさ。何故つて死は私達の生きて居る間は何の關係もなく死んでしまつたらもうすでに問題とされることも出来なくなるものだから。」と。

然し乍ら彼はロイド眼鏡の奥から鋭い視線を僕に向け乍らコクリ／＼と無言の返答を僕に與えた。その煮えきららない態度に僕は終止符を打つべく重ねて云つた。「死は泰然として迎えるべきだよ。何故なら死は私達を本來の自然に歸する事に過ぎないのだから従つて死に對する恐怖は笑うべき感覺の迷妄だよ。」と判然とせぬ感覺なる文字を使つて彼を糺明した。

僕にとつて何より苦痛だったのは年長者にあり勝ちな「お前はまた若いよ」なる言葉だった。彼も別れる時「君も未だ若いよ」なる含みの

ある言葉を殘して闇に消えて行つた。

然し乍らそう云う私も激烈な空襲の結果生への執着に全くの俘虜となつた私には彼の存在は既に無視されつゝあつた。

それから間もなく敗戦となり我々は元の古巢に歸えつて判然とせぬくせに分厚い参考書を抱いて唯我獨存の氣分を満喫していた私達の前に彼の特徵のある笑顔を我々に見せたのは終戦の除夜の鐘を聞くに程近い冬期休暇に入らんとする或る暖かい冬の日ざしを浴びていた午後の事だつた。長らく休んでいた理由を僕が詰問すると彼は佻しげな笑顔で黙然としていた。忘れもしない休暇明けの元旦氣分に人々が我が最良の年を祝つていた頃僕は突然T君の母上の來訪を受けた。彼女は私の前に息子の病狀の悪化して今では數年床の主となつている事や彼が小生に對して何等かの話があるらしい事を涙ながらに話して僕の同道を求めた。僕も彼女のたつての願望を固執する譯にもいかず外套を引っかけ

て外に出た。

道すがら彼女は動員の過勞より來た病狀や僕に非常に會いたがつてゐる事、又親父のいないブランドのある家庭に卒業と同時に嫁を迎えて樂をしたいと女親にあり勝ちな愚痴も一緒に聞かされてT君の家に着いたのは皆夕餉の膳に向つていた六時頃であつた。

戦災の結果同居生活に甘んじてゐる世人を尻目に彼の自室は豪勢なものだつた。

數年床の主とは云えT君の面影は何等變形してゐなかつた。

枕元に積み重ねられた分厚い圖書も神經質なT君の性格とマッチして整然としていた。

僕はお定まりの病狀見舞を述べた後、T君に學校の最近の様子や社會狀勢を述べると彼は此の種の病者にあり勝ちな咳をしながら涙を流さんばかりに嬉々としてメモを取りながら聞き入つていた。

あまり刺戟ある話はしない様にとの母親の注

意が伝えられたのは彼が目まいがすると云つて

床に入つたのと同時だつた。そんな譯で何等の彼から要求する物語を話さず聞かずに早々として彼の許を辭去したのは、木枯吹く十時頃だつた。大した事もあるまいと安心して歸宅した僕の處に訃報が通告されたのはあれから三ヶ月経た後の事だつた。

勿論三四回は彼に刺を通じたのであるが彼の母親はあれ以來強力に面會を拒否し切實なる要求をT君の許に通ずる機會を與えて呉れなかつた。

生前あらゆる醫師の診斷を信じなかつた彼も幾度か僕の來訪を求めたらしかつたが母が此の病氣に特有な醜狀を友に見せまいとする親心でもあつたのだろうか。

そんな譯で彼が生前抱いていた思想も其の他の全ても私には判然とは掴み得なかつた。又掴み得ずに櫻の散る如く散つた彼の生涯を僕が未知の何物かを求める様にむしる思い出となるこ

とを不幸中の幸と考へてゐる。

遺言に依つて彼の名刺大の寫眞と未讀の圖書の數冊が届いたのは、それから一週間後であつた。

金藏落し

秩父支店

冷

水

山小屋には今朝も山霧が深く垂れて早くから神社の祈禱が始められたのであろうか太鼓の音がかすかに流れてくる。お種は昨夜父親に對して思い切つて云つた忠言が今更ながら悔いられて來た「獵師を止めて何して食つて行けるんだ」と父は只答えただけだつた。お種は物心ついてからこの方父の獵に依つて得る獲物を金に代えて生活して來たことも知つて居るし、殊に母が長い病床のあげく淋しく死んで行つてからと云うものは父娘二人のわびしい生活であつた。父親が澤山獲物をさげて元氣よく歸つて來ればお

そんな譯で彼が生前抱いていた思想も其の他の全ても私には判然とは掴み得なかつた。又掴み得ずに櫻の散る如く散つた彼の生涯を僕が未知の何物かを求める様にむしる思い出となるこ

種もやつぱり嬉しかつたし、獲物にあぶれてさびしく歸つて来る父の姿を見るときは自分も傷しかつた。だが命を断たれたむごたらしい獲物を見たり血なまぐさい父の着物を洗うときなどは沁々と悲しい思いに沈むのであつた。

今日も元氣よく父親の金藏は火繩銃を肩に聞き込んだ大熊の居ると云う山を指して尾根を越えて行つた。お種は重々しい太鼓の響を聞きながら一月ほど前に一夜の宿を借した白衣の行者が言つた『このまゝ、獵を續けることは山の靈にさわる、止めなければ父娘の生命にかゝるかも知れぬ』と云う言葉を父親のやうにむげなく否定する氣持にはなれなかつた。何かしら暗示的な無氣味におそわれた。この上はどんなことをしても父親を説き伏せて獵師を止めさせようと思つた。

獵師の金藏は熊を探しあぐんで疲れ果て、さなきだに秋の陽は早くも山の端に落ちようとして氣がいらだつて居た。突然前方の崖の上に黒

いものがつくまつて居るのを發見した。『熊

だ』と金藏は雀躍して銃を構えて見直したがやつぱり熊だ。然も寝込んで居るのか動こうともしない。金藏は満身の力を込めて火蓋を切つた。硝煙が山に立ちこめて手ごたえがあつた。のか熊は溪谷へ落ち込んだように思えた。だが併しこれは又何んとしたことか、それは熊ではなく父の獵を止めさせようとして熊の皮を被つて待ち伏せて居た娘のお種ではなかつたか、獵師の金藏は娘の誠心に打たれて獵師を止めると共に只一人淋しく山に住んで居ることもたえられず間もなくお種を我が手にかけた溪谷へ自ら身を投じてしまつた。

斯くして數十年の歲月が流れ山には春秋の花が毎年同じように咲き亂れた。三峰参拜の人達がバスの窓からのぞき見る溪谷の美しさに、驚異の眼をみはる大達原隧道附近の絶景『金藏落し』只今に傳えられる奇しき傳説である。

解 脱

入間川支店 美 登 利

75
私があなたにどうしてもいゝたい、そして聞きいれていただきたいことは、私との縁を諦めて人生の悲痛な試煉から雄々しく立ち上り解脱して戴きたいということです。あなたの私に對する強い情愛は私にとつて誠に嬉しく、情の厚い眞心のある人だと、ほんとに有難く思つています。然し今更どうにもならぬ兩親の反對——前途あるあなたがそれによつて人生への希望を失い、唯破戀というその個人的悲哀に没し過ぎて意氣消沈し他人に後れをとる様ではよくない事だと思ひます。——勿論個人生活の心情というものには、人間として大いに支配され勝ですし、又支配されたとしても人の道にもとるものではなく、なんら非難されるべき筋合のものではないと思ひますけれども、それに溺れ過

ぎるのもよくないし、そうすることはあなたの我儘というものではないでしょうか。

あなたの私にそゝいでくれた愛情がたゞならぬものであつたことを身にしてみても感じて居るだけに、あなたの今の寂寞も、悲哀も、空虚も私にはわかりすぎる程わかつております。でも私達はお互いにそこを堪え忍んで、苦難の坩堝の中から抜け出る時、私達は再び光明を見出し得るのではないのでしょうか。

私はあなたと別れて生活していても、私の幻影は常にあなたに同伴しています。そしてあなたが悲しみから雄々しく強く立ち上り、前途に希望をもつて進まれる將來を見守ります。

お酒に酔つて、魂のぬけた人の様にふらふらと夜道をさまよい歩いていられるあなたのいたましいこの頃の生活を眼のあたりにえがく時、あなたの將來を按じ、かなしくてかなしくて泣けそうです。

でもあなたに、この事がよい事かいけない事

かお解りにならない筈はないと思います。今あなたは生活意力を失つております。その結果、人間の弱い感情に取圍まれすぎています。こゝでひとふんばりして、悲しみに堪え、更に一步飛躍してあなたの新生活への勇しい建設にとりかゝる様意氣込んで下さることを心からお願ひしてやみません。

これが、あなたを愛していたI子の切ないお願いです。I子を失つた悲しみから解脱して、新たな第一歩を踏み出して下さいませ。

かしこ

I子

M様

重盛

本店營業部 しまだ・もりを

「夢であつたか」

重盛は脇息にもたれた儘あたりを見廻した。

弱くてらしている灯をかこんで蛾が一つづると飛び廻つてゐる。廣い屋形は庭に鳴く虫の聲に一入静けさをまして死そのものであつた。「夢か」——重盛は又呟いた。

平家一門の滅亡の有様を今夢とも思えぬ程ありくと見たのだ。人の命を奪ひ合う戦が開かれてゐるのを——

多数のものに取圍まれ斬つけられても尙生に執着をもつ父清盛の狂人の如く刀を振まわしてゐるのを、宗盛が傷つき重衡が倒れているのを、最愛の維盛が「父上」と叫んで最後を遂げたのを——

餘りにも恐ろしい夢であつた。聽て平家はかくの如き末路をたどるのだ。極端に榮ゆるものゝ極端に亡ぶ事を彼はよく知つていた。

目前に迫つてくる大きな危険を手に汗をにぎつて見なければならぬ自分を——そして心の中で二人苦しまなければならぬ自分を悲しく思えた。體はぐつたり脇息にもたれたまゝ動かなかつた。

治承二年秋のある夜、

父親と金助

加須支店 Y 生

祖母はどう／＼息を引き取る時、「お前しつかりしておくれよ」と、謂いながら金助の方に眼をやつた。金助は母の側に位置して居た。母が「金ちゃんに謂つて居るのだよ」と促したので、金助は仕方なしにユツクリをした。

金助の父親が銀行を罷めたのは、祖母が土になつた圓明寺の薄暗い墓地にも、柔い春の陽が覗く頃だつた。或晩父親は歸路家の前を通り過ぎて隣村近く迄行き、通行人を捉えて「此處は

何處でしよう」と聞いたと云う。父親は其の人に連れられて無事に歸宅する事が出来た。父親が酒の爲に前後不覺になるのは、此頃、珍らしい事ではなかつたのだが、此の出来事以來家族の父親に對する心配は更に深刻なものとなつた。血壓で健康が許さぬ事、之が父親の退職の癖であつたらしい。

金助が銀行へ入つて最初の宴會の時、支店長が謂つた。「君の御父さんも愉快な人だつた。何時かの大晦日、終り際に君の父さんが見えない。皆して探して居る中に誰かど発見した。驚いたね、其の頃銀行の隣は例の鳥金と云う料理屋で、其の鳥金から微かに聞える都々逸の主が父さんだつたのさ。」入行以來二十何年、最後まで出納係だつた父親は銀行員としても慥に特殊な型だつたらしい。

金助から見た父親の性格はユーモアの一語に盡きた。父親の行く處必ず出来事が突發し、問題が紛糾した。其の道々にはユーモアが父親の

来るのを待つて居るが如くだった。だから金助が小説を書く場合、父親の日常から題材を取らせば結構一つの傑作になった。金助は父の此の性格を愛した。或る時は尊敬した。そして或時には恐れる事さえもあつた。

金助の母親はクリスチャンだった。金助が母親に奨められて教會へ行つた時、三日目に傳導師が「君の母様も、信者と結婚をなさつて居られたならば、もつと幸福だつたでしょうね。」と云つたので、金助は其以後、教會へは行かなかつた。一つには傳導師の父親に對する名譽毀損を憤慨したからだつた。其の代り金助の父親に對する不満も決して少くはなかつた。金助が折角大學を卒業して、ケインズやシムムペーターを論じて、父親はさつぱり感心した顔もせず、「分つたから早く寝ろ。」と謂つた。

其の晩は久しぶりに冬らしい寒夜だった。母親と金助は上京した父親の健康を案じて、遅く迄起きて居た。母親は父親の病氣を頻りに心配

した。金助は金助で、自分の縁談を父親にのみ任せて東京へやつた事を今更の如く後悔して居た。

父親は案外疲勞も見せず無事に歸宅した。もう、何かあつた證據には、愉快そうに思い出し笑いを繰り返して居る。母親が「吉川様は御會いになりまして」と問うと、父親は其んな事には答えようともせず、買つて來た菓子を出して自分から喰べ始めた。其して「金助お前もやれ」と謂つた。金助はもう餘り多くを期待出來ない。と直感したので、何時もの様に父親の出來事を聞く事にした。父親は久しぶりに得意だつた。

「實は今日久しぶりに淺草の六區へ行つた。お前、彼地に女の首だけの見せものがあるだろう。」「往きにですか、歸りにですか」金助は眞剣だつた。「勿論往きには、すると香具師が此の棒で俺にあれを、突いて御覽と云うのだ」

「突いたのですか。」今度は母親が眞剣になつ

た。「俺はやつて見たのさ、俺の前の奴が箱の前から許り突くので、俺が側へ廻つて突くと、其の女が『きゃー！』と云つたのさ。」金助はもう何もかも諦めた。母親は「香具師が怒つたでしょう」と聞いた。父親はいよく得意になつた。

「何ね愉快なのは其の後だ」「何です」と、金助も面白くなつて來た。父親は更に謂う「其の香具師こそ、昔此の町で育つた、俺の友達だ。山口と云う男で、あつちから『よう！』と云うわけさ」

「眞實ですか」金助は夢心地だつた。「其の證據には此の通り一杯、其の香具師と差向でさ」

「御酌は誰でしたの」と母親が呆れて聞いた。「心配するな、酌は其の見世物のロクロ首さ」

其の晩、床の中へ入つて、金助は自分の一生を回想して見た。

子供らしくない子供、此んな子供がよく居るものだが、金助は正しくそれだつた。其の頃金助は小學校の片隅で何時も腰を下した儘、ボ

ツネシと考え込んで許り居た。仲間はずれを自覺して居たからだつた。

小學校へ入る前の金助は誰から見ても無邪氣だつた。一體金助位、幸福に育つた人間がそう大勢居るものではない。母親と父親は交るゝに金助を抱いて寝た、丁度、六歳の頃、金助は醫者の誰からも見離される程、ひどい疫痢をやつた。其れ以後、ズーと金助は憂鬱な子供になつてしまつた。家の中に許り閉じ籠つて居る。両親は此の性格の變轉を心配した。母親は金助に辨當を持たせて、銀行の父親の處へ届けさせた。出来るだけ金助を外へやるようにした。父親は其度に「駄賃だぞ」と謂つて金助に二錢づゝ握らせる事にした。

或日、父親は奮發したつもりで、金助に五錢白銅貨を與えた。問題はこれからだつた。

子供はギン貨を持つと巡査に縛られる。

神經質な金助は此の言葉を克明に恐怖して居た。だから、歸路警察署の前を通る時は、もう

夢中で、家に入った時には殆ど生きた顔色ではなかつた。金助は始めて父親を怨んだ。

其の晩、父親が何事かあつて、「頼むから母様に俺の事を謝ってくれ」と謂つても金助は知らぬ顔で「厭だよ」と反抗した。父親は始めて我が子の革命を意識した。

此の金助が父親に反抗し續けて、やがて又父親と和睦する間、外には何年かの歳月が流れ、中には金助の成長と、父親の老とがあつた。中學へ入つた頃、父親は金助と食事をする時、其處の女中に謂いつけて金助にもビールを持つて來させた事があつた。金助は父親が其んな事をするのを淋しく感じた。「此の人は何時の間にか精神的にも弛緩してしまつたのだ」と父親を哀れんた。「そんな事もあつたづけ」と、金助は思はず溜息を吐いた。

靜かに父親を批判した後、金助は、輒近に於ける父親の此の圓熟されたユーモアに對して、尊敬してよいのか、恐るべきかを今夜こそ判決

しようかと思つた。

自己の環境が幸福なのか不幸なのかを、公論に訴えようか、とも思つて見た。

所詮、水平線で海と空とが觸れ合うが如く、父親と金助との心が觸れ合う線は、遙るか彼方にのみ存するのであるうと、金助は纔に自己を慰めても見た。

其の晩外は雪だつた。雪は翌朝迄降り續いた。やがて、金助が眼を閉ざして意識の世界から、夢の世界へ入ろうとした時、「金助お前しつかりしておくれよ」と、謂う祖母の聲を、金助は、圓明寺の二十尺の土の下に聞いた。

「糧追う人々」(第二回)

大宮支店 美奈川倫三郎

「狭き門より入れ、滅に至る門は大きくその路は廣く之より入る者多し、生命に至る門は狭くその路は細く之を見出す者少なし」とさうに「求

めよ然らば與えられん、尋ねよさらば見出さん、門を叩け然らば聞かれん、すべて求むる者は得たづぬる者は見出し門を叩く者は聞かれるなり」と聖書は云う、救はれんが爲には又己れを救え堪ええぬすべては堪えうるすべてを知らんが爲の手段でありそこに生きる人間への何かがあるのではあるまいか、青と黒、そして白光が一定の輪廓を描くはずの映つる山、森、畑は健作の眼には模ごとした交さくしたシンフォニーの如くに映つた。冷水を頭からかぶされ様な寒氣が一瞬彼の身體を頭から足にかけめぐつた後の彼は、はげしくこみあげる熱さにかつくと鳴つては、口が火の様にやける、頭の芯がくらくらとする。彼はそのまま道に突立つていた。「俺は一體どうしたつていうんだ。間違はない確かにこの耳で聞いたんだ。本當の事なんだ。それなら何故こんなに俺は驅けなげりやならなかつたんだ。早く家へ歸れば、それだけ早く解決すると思つたんだ。いやそれだけ

救はれるとも思つたのか、苦しむのは俺なんだ。誰でもないそれだけ俺は苦しまなくちやならないんだ。俺には美代や親父に見た通り聞いた通りが何でいへる義理がある。だがそれは古い事だ、そんな觀念は捨てるんだ。捨て、それから新しく浮かぶんだ。とはいうもの、何故親父は美代は一言これだと話をしては呉れなかつたんだ。俺は美代が親父が好きだ。だからこそ俺は一體この俺は何故美代や親父をうらまなくつちやならないんだ。倒れる様に建作は道の草むらに吾とわが身を打ちつけた。じびれる様な腰の痛み、そこには青い春をつげる麥の葉なみが靜かに音をたてていた。「暗い」「憎い」「苦しい」そんなものが彼の頭の中を走つた。「機械人間にもし感情があるとすれば、無限の哀傷の外の何物でもないつて誰かといつていた。だがこの麥には生命があるんだ、何か力がある。それは本當に土に生き、土と働く喜びにひたりきつた土百姓ぢやなければわからないんだ。その

爲には俺達は唯水を飲んでいただけだつて、やつていけるんだ。土への俺達の執着からどれだけ俺達百姓の生活のすべては充たされて来ているか知れやしないんだ。……俺が土百姓で生涯を了る事は運命の星がそうさせたのかも知れない。俺は美代を妹として可愛いがつて来た。だがそれは何時のまにか自分でも知らない中に愛して居る様になつてしまつて居た。俺は先刻妹ぢやないと解つても美代を外に考える事は出来なかつた。いや今の俺は、俺以外の誰にも美代を渡す事は出来なくなつてしまつて居る。偶然ぢやない。偶然ぢやないんだ。この愛しきれる氣持これが偶然だつたら運命つてのは一體何なのだ。俺は百姓だ、美代も百姓。それでいゝんぢやないか、それを一體誰がかきみだそうとじているんだ。何故俺達の運命をひき落すんだ。あゝ俺は氣が狂い相だ、一體俺はどうしたらいいんだ」建作は自分の握つた拳から乾いた土がはらりとこぼれるのを知らなかつた。かきむ

しつた彼の頭からこぼれる土のかにまよりも、彼の顔は涙と土でどす黒く光に浮いて見えた。「馬鹿馬鹿、馬鹿野郎」どなつた聲が反響して聞えた。「馬鹿」もう一度どなつた彼は又反響にどなりかえされ、彼自らは一層ふりきれぬ哀愁におそはれてしまつて居た。星は冬の様にすき通つた夜空に彼を見下して居る様にまた、い居た。「建さか、あつ建さじやねえだか……一體そんな所でどうしただ、え、」太吉の聲がすぐ近くに聞えた。だがひからびた彼の口は返事をすゝる氣力もなかつた。依然あふ向けにねころんだまゝの彼は近寄る太吉の氣は、いを身近に感じた。「わかるだ、わかるだよ、お前の氣持は、おらあようくわかるだ」すべてはわかつた、そう合點しつゞける太吉であつた。「建さ……」「小父さんには一體何がわかつただ……おらあの今の氣持は何處のどんなもんなんだつてわかりやねえだ、わかつてなるもんか」建作のたかぶつた胸は太吉の一人合點にとめどなく反撥した。

「無知な鈍重な動物同然の慰安しか與えられず又それですべてを満足しまつて居る。それのみではない、封建的な人情のどらわれを一步もぬけ出して居ない、こんな虚勢された土百姓にこの俺の苦しみが簡單にわかつて堪るもんか」建作は、この時始めて太吉を光る眼で迎えた。だが「建さまう氣を静めてな、氣分さなおつたらな早く歸るだ、家さ親父や美代さが心配するでな、うんそうだ、こねえた村境さ家からもらつた濁酒があつた筈だ、なあに少し位、手間さつてもいいかべ、どうだ建さ家けいりによらねたか、それがいいだ、はお、つめてえ風だ、ひえるとなんねえ、あゝ建さ、……」べんにきゆうと身體中があつたまるだ……そうか、じやあなおらあいくだけどな、早く來るだ、な建さ……待つて居るだからな」あきらめた太吉は、こういふと、とぼとぼと離れていつた。そのまゝ太吉を見送る建作の耳は異常な感動におのゝいていた。何かぐつと來るもの後悔が矛盾が彼自らの

言葉から彼自身の氣持をじわり／＼とせめつて來るのであつた。「美代も妾も土も俺は愛して居る。俺は百姓だ、なのに何故その口の裏から俺は小父さんを輕蔑しなければならなかつたんだ、偶然にじちやあ餘りに偶然過ぎる今の俺だ矛盾だ、運命じやあない」己れの柱が、何處か空に吹き飛ばされた様なシヨツクが、瞬寒氣と共に彼の頭から足先まで走つた。ぐつと力を抜いた指先を眼の前に見た。確かにある、くつゝいていた。五本の指、彼はまだ安心出來かねた。力を入れてひじをついて見た。しめつた畑土は、やわらかにひじにこたえた。それでも立てる。彼は力が信じたかつた。己れが信じたかつた。彼は反動を付けて立つて見た。そして自信を取戻す様に彼は二、三回足踏みまでして見るのであつた。「そうだ俺は自信を失つて居たんだ。でも俺は……いや、うぬばれ過ぎていたんだ。調子に乗つていたんだ。美代だつて俺よりも、もつと他の誰かによつては幸福になれる

んだ。あゝ知らなかつた。俺の愛情はこんなものじゃなかつた筈なのに。誰か云つたが「敗北的エゴイスト」まるつきりが俺だつたんだ。見る、俺の様なもの、尻の下に敷かれていたこの麦は、外の健やかな麦と同様に、いやそれ以上には伸びていくんだ」建作にはこの時始めて笑いが立ちもどつて来た。彼は始めて覺えた人間の様に一足一土を踏んでいた。狭き門より入れ、彼は又笑つて見た。

太吉の家には未だ明りがさしていた。馬鹿正直に待つてゐるであろう太吉の姿を想いうかべると逃れる様に彼は足を早やめて通り過ぎた。彼の家の柿の木がすつと道に張り出している垣の所こゝ迄来た建作の前に太吉の顔がふつと浮んだ。錯覺だつた「濟まねえ」一聲殘すなり彼はかけ込んだ。建作は立つて来た美代にも、いろりを前に坐つたまゝ迎えてくれた治作にも、常と變ぢない態度をくれたのが、彼にはむしよゝうに嬉しかつた。だが治作も美代もそゝばい

なかつた。治作にしてみても、美代にしてみても彼がむしろ昂奮的に出ていた方が救はれたのかも知れなかつた。建作が常日頃の彼に變りになかつた事が、いやそれ以上に落着いた様子だつた歸りが妙に彼等の氣持をこじれたものにしたのである。その様子が自然建作の氣持に何か變つたものと感じさせた事は寧ろ當然といつてよかつた。それが秘密を知つてしまつた彼を何か堪え得ない氣持にさそつたのも又當然の成行きであつた。悲劇そんなものよりかえつて笑えない喜劇、そんなものが一瞬彼の胸をついた。

「美代明日な朝六時の馬車でいぐだ、辨當三食分と米き出しといて呉れさ」治作に一禮した建作は、そのまゝでいに入つた。でいと奥座敷の意なり)でいは彼と治作の寢室として夜は使つて居た。美代は手前の八疊の方へ平常ねる事にして居た。朝の仕度にして、その他何かや早起しなればならぬ美代にして見れば、この方が便利だつた。併しそれにして行

く、は夫婦にしようと考えている治作にして見れば、この地方の習慣で、男女は結婚する迄は室を同じくさせない、そいつた觀念にとらわれてゐるといふ事は、いなめない事實であつた。部屋には、もう床がとつてあつた。むしやくしや混亂しそうな焦燥が、彼の頭の中で火花を散らした。ねるんだ。手足をぐつと冷たい夜具にのびした。冷たい夜氣が夜具のすき間からすつと入つて来た。「それにしては美代は知つてゐるのだろうか、知つていれば俺に話さない様な美代じゃない。この問題の解決はそれからでもよかつたんじやなかるうか、じや知らなかつたのか、それならそれで……だがどうも變だ。いつもの美代じゃない。親父はとに角として、俺は落着いて積りだつた。だが女の事だから俺の顔に何か感じたのだろうか」建作は想像が反省を、反省が想像をくりくり始め、自分の頭を意識していた。胸のどうきが鈍く、だが規則的に、彼の神経を刺戟して来たのだ。

「疑惑」そんなものが、土間からもれるかすかな衣ずれにもなつて彼の頭のすべてを支配して来て居た。だが彼に、それにも増して致命的だつたのは治作と美代が何も話さない事であつた。聞えたら困るといふのか何故ねないんだ。そんな事に迄彼は神経を集中して居たのである。「話したはりや、この俺に聞える様にはないや話して見ろ、この村中に聞える様にはない。何故しないんだ……俺は俺は聞きたいんだ。はつきりと親父の口から、この耳で聞きたいんだ。秘密をそりや俺の事なんだ……美代だつて親父だつて俺は別れたつていゝんだ」だが彼の臆測は低いがそれも現實の物音でやぶられてしまつた。土間をひたぐりと歩く草履の足音だつた。美代は辨當の仕度の準備をふと思いついたのだつた。「兄さの」そんな眞情がやはり建作の氣持を同時におそつていた。「美代」離るべからざる悲哀ひじく／＼とせまる愛情は痛む程の苦痛となつて身にせまつて来たのであつた。や

がて彼は眠つていた。治作も、美代も、眠りは平等に彼等の上にあつた。そして大吉の家にも、いや村中の家の人間の間に、やがてそれは雨戸からもれる朝の光に、再び活動をとり戻して居た。やがて沈たいした冷い部屋の空気に新鮮な一線を劃する頃建作は眼を覺した。

無意識にのび切る手に煙草ケースは水の様な感觸を與えた。大きなあくびとともに起き上つた彼はその一本に火をつけた。土間からは暖かそうな味噌汁の香りがたゞよい來ていた、それが吐きだす紫の煙に彼には類ない幸福感をもし出すのであつた。隣りだがそこにはねている筈の治作の姿はなかつた。大きくのびをした彼はふと、つき出された様な起き方をした。つか／＼と八疊を、そこにはまだ美代の床は片附けてなかつたが、土間に面した止りつばなに立つた彼は美代を眼であつた。「美代、美代、お父つあんどこさいつた」かすれた聲が土間を一ぱいに響いた。「あゝ兄さもうおきたか、お父つあ

ん鎮守様さいぐつてさつき出ただよ、兄さに聞違げえあつちや何んねえだいうで、そんなに今朝早う大吉さんが來たべよ、何か兄さんの事いつてただが、お父つあんといま先刻二人でいつただ。何か兄さんのべあつたのけ」「そうか、」建作は崩れる様に止りがまちに腰をおとした。「兄さ」「……」釜の息が激しく吹き出した。美代は建作から「釜が」といわれても離れる事は出來なかつた。何か兄がいゝ出しはしないか、昨夜の出來事つまり父との秘密は、彼女の神經を刺戟するには、餘りに強烈であつたのである。

「美代何してるだ、釜が吹いてるだ」兄の荒々しい語氣にふとくびすを返した美代ではあつたが、やは釜に向うだけの勇氣は突差には浮ばなかつた。併し兄の激しい態度に對される様にかまどに向つた美代はやはり女だつた。急いで引き出した生木のもえさしの煙は一氣に彼女の眼を鼻を、一面におほつた。じいんとにじみ出る涙に彼女は何か別の意味でのこみあげが

胸の底からついで、ゆるのが堪まらなかつた。「兄さ」反射的に彼女は鼻をすゝつた。今迄こらえていた感情の、つづが崩れる様に、一氣に涙となつてしまつたのだ。「兄さ」釜のふたをぎぎぎした時は彼女はもう泣いていた。「美代、美代」激しい、併し虚空な兄の聲に、一寸と眼頭をぬぐつた美代は小走りに建作にかけ寄つた。兄の聲は立て續けに美代を呼んだ。がその後は静かだつた。「……美代何かあつたな、お父つあんと……でもおらあ知つてただ、何もかも、おらあお父つあんやおめえの口から何度聞かしてくれたらと思つたか知れやしなかつた。だが、おめえのいじらしい様子や、お父つあんの氣持を考えたらもう、そんな意地を張り通す氣持もなくなつてしまつただ。」ぐつと立ち上つた建作は、ほぐれる感情と共に一氣に美代の身も心もくだけよと許りにだきしめた。胸を肩を、そして五本の指の一つ一つにぐつと力をこめた建作のその全身は、やがて感情を全身に委ね切つ

た美代の均整のとれた肉體の感動の一つ一つを、はげしく意識して居た。「美代おらあおめえを愛しているだ。……おらあおめえが好きなんだ。……おらあもう何處へもいかねえだ。例え誰に何といわれてもおらあ一步もこの家から出るものか、美代、美代、おらあいがねえ、いがねいだ」もう上つて來る建作の美代の感情は、始めて經驗するよめではあつたが、何か二人には物足りない場面であつた。だが經驗のない二人には接唇にはやゝ氣おくれがしたのであつた。力をゆるめた建作は美代の顔をしみんと見つめた。美代は美代で、今迄の涙が何のために實體がされたのかを疑つて見たい位に幸福感にまひしられる事が出來た。これが所謂世にいう幸福なのだから、眞實の、そう反問もして見る彼女ではあつたが、すべては現實が、兄の、いや夫となるべき建作の言葉が解決をして呉れた。「おらあ達二人はしつかり手を握り合へれば、それ以上強いものはないんだ。これは例へ

生み親だつて引離す事は出来ないんだ」「でも」
 「いゝんだ、いゝんだ美代」「兄さん」二人の
 互いの唇は心ゆくばかりの熱情を信頼を結びつ
 けて居た。先刻から歸つて来た治作は、家へも
 入れず軒下になぐすんだまゝで居たが、彼の受
 けた感動は二人以上の、それにも増して強か
 った。眼頭にあふれ出る光つた涙の玉は、すつと
 日やけした顔を、しわにそめて引かれていた。
 しばらくの間彼等の交々の感動は續いていた。
 それが共通なものであると共通なものでなから
 うと、彼等は彼等自身によつて共通な苦惱から
 脱する事が出来たのであつた。

「治作さ、どうしただ」けん相な太吉の聲が
 聞えた。「これ太吉」制する治作の聲、はつと氣
 がついた建作と美代は、殆ど同時に笑い出して
 しまつた。建作の笑いは、自信のわいたもの、
 美代は眞の幸福の喜びをうたう笑につられて笑
 い出した。治作の太吉の笑いは解放された安ど
 の笑い、それらは互に共通した心からの笑いで

あつた。下屋の鶏が時をつけた。

久子はこの頃になつて自分の東京出が始めて
 人生をあやまつてしまつたという事がはつきり
 自覺出来て来て居た。考えたつてどうにもなら
 ない。だがそれはたつた一つきりのもの、かけ
 がいのない生命の根本だつたのだ。悔いても及
 ばない事だが、考えれば考える程うらめしくも
 あり、恐しい現實の強迫だつた。「父無子」こ
 の世の中に、この言葉さえなかつたら、こんな
 結果には凡らくならなくつても済ませたのだ。
 飛躍が飛躍を呼ぶ確かに三度目に上京した彼女
 には懐しがるべき故郷もそれ程に東京のみ惑の
 前には比ぶべきもなかつたのであつた。
 堀端のよどんだ水は、かすかな春風のなかに
 かるくゆすられて居た。水底にひそむ水藻もさ
 すがに春を思わせる様なゆうきをみせていた。
 思つたより大きい、古い石垣をつくる石のそれ
 をそれは、くねつた松の古木と共に、落着かぬ時

の彼女の心を巧みにとらえて慰さめてくれるこ
 の東京での唯一の存在であつた。彼女は、たび
 々、相互ビル、帝國劇場、都廳の焼ビル等の建
 築を望み、銀座の雑とう迄もとゞき相なこの場
 所が、如何にも静寂に置かれてある事が田舎出
 の彼女には驚異だつた。こんな不調和の中に、
 どうしてこんな調和があるのだろう。それを又
 何故都會の人は平然として眺め賞美する事が出
 来るのだろう。こんな事も田舎出の彼女の心を
 この場所がとらえた一つの原因であつた。「あの
 人から、あの手紙を受取つて、始めて歩いたの
 は、こゝだつた。だがこの場所にしたのは、寧
 ろ私が指定したのも同然だつた。それから、あ
 ゝ私は考えたくない、考えるのもいやだ」久子
 はこう思いながらも断えず歩き續けた。

彼女をして男女のすべてを知らしめた、あの
 タペの、この道は、氣をつけて歩けば歩く程に
 松の古木の根が張りつめていて、行手を凹凸の

はげしいものにして居た。恥らしいに似た若い女
 の聲が聞えた。其處は垣根深くぼみを作つて
 いた。
 (以下つゞく)

月 光

川口支店 しのお草

眞暗な中を舟は行く、ぎいぎいと池に向
 う櫓の音だけが邊りの静寂を破る。時たま遠く
 の方からビィヒョロと囀子の笛の音が聞えて
 来る。星一つ無いどんよりと曇つた空「明日の
 祭りは降られるかな。」と渡邊さんが櫓をこぎ
 ながら云つた。そうだ。明日は此處の湖上祭だ。
 月がかすむ春の夜の」と前に乗つて居る安田
 さんが小さな聲で歌い出した。暗い晩だけに何
 となく胸に沁む一抹の哀愁を覚える。月と云え
 ば去年の夏此處へ来た時の事なんだけど。」と
 渡邊さんが話し出した。「此處へ兄貴達とやつて
 来た時の話なんだ。やつぱり皆して舟に乗つ

ていた。丁度今頃、とても月の明るいきれいな夜だった。月が出ている岩角のうつそうと生い繁る大木が黒い巨大な一つのかたまりとなつて水面にかける。小波がきら／＼と月に反射して何とも云えぬロマンチックな晩だった。僕がその美しい水面に、ちつと眼を注いでいると、白いものがふわ／＼と波に浮いているんだ。そして何か黒いものがまつはりついている。女の死體。フツと頭に浮んだ。おいあれを見る。皆なの眼が一せいに僕の指先を追った。その美しさは恍惚としてしまった。僕はしばらく云う言葉を知らなかつた。「早く助けなくちゃ」と誰かど云つた。ハツと我に返つた僕は全身の力を櫓にこめてその岩角に舟を向けた。恐しさと好奇心とで胸は早がねの様に打つ。す／＼と岩角に舟をすべらせた。月の光りは湖上一面に晝の様な明るさになつて輝いている。そばまで行つて、それ／＼と立ち上ると、何だ君、それは只の岩だつたんだよ。黒く見えたのは藻だった

のだ。」と口をつぐんだ。私もほつとすくわれた様な氣持になつた。「ほつとした様ながつかりした様な氣持で舟を岩から放した。何となく名残り惜しく思つた僕はもう一度ふり返つて見た。すると君、やつぱりそれは美しい人間の姿なのだ。皆もやつぱり見ていたらしい。すつかり感激した僕らは「魔女岩」と其の岩を呼ぶ事にした。それから月がきれいな夜言い合つた様に舟に乗つては其の岩を見に行つたもんだよ。あゝそう云えば今年はどうしたんだろ。どうだい。皆して行つて見ようじゃないか。」うそだと思つていた私はまさかと思つた。すると皆が「うん、行こう」「連れてつてよ」と云い出した。衆議一決舟は目的の岩へと湖上深く進む。途中星が一つ二つ、奇蹟の様にまたぎ出した。まるで魔女が神祕の扉を開く様に。岩に近付く頃に月が少し登り始めた。皆の顔が朧の光りで見ると、好奇心に燃えている。ひつそりと静まり返つている。私は益々輕蔑の

逃げ道

大宮支店 助

兒

感おさえがたく、刻々と進む水面をまだかくと見つめていた。月光が湖上一面照らす頃、渡邊さんが云つた様に、巨大なかけが水面にうつり小波はきら／＼とそれは／＼美しい情景だ。「あつあつだ。」と誰かど叫んだ。其の聲のする方を見ると、お、何と其處には人魚の如き姿が、波にのつて悠々と横たわつてゐるではないか。お、美はしき姿そはヴィナスの影像かと、今迄の輕蔑は一べんに去り只其處にはうつとりとした空氣が漂つてゐる。「あ、有つて良かった。」と、渡邊さんが感激した様な聲を發する。「そば迄行こうか。」と云う聲にすがる様に「此のまゝ歸りましょう」と私は叫んでしまつた。舟は其のまゝ湖上にもどる。月光を浴びて映ゆる人魚、いや魔女岩をいつまでも／＼見つめながら、降る様な星の夜、明日は素晴らしい湖上祭が出来るだろう。

ボソ／＼と十年一日の如く繰り返す味の無い講義に身をもてあました學友達を道づれに挨拶しながら歩いて来た私は、新橋の驛前にさして小さくもない人だかりを見付けた。なんだらうねと友達と顔を見合せてそれに近づいて行くくと、大してうまくもないアコーデオンの伴奏に合せて唄う歌聲が聞えて来た。あまり大きな私には、前の人の肩につかまるやうにしてのぞきこんだと思はずハツと息をのんだ。と云つては、大げさな形容だが一體どうしたと云うのだろう。あのアコーデオンを弾いている男の顔は、私はもう一度その顔をたしかめるやうに背のびをしてのぞきこんだ。

油つ氣のないボサ／＼とした髪の毛をふり亂

した顔の両眼は、無残にもつぶれている。と云うより片方の眼は、眼と云う形を残してはいないのだ。そして口元には、うす気味の悪いひつづれが右の耳へかけて大きくその跡を残しており、おまけに顔を二つに仕切つたような不調和な鼻を持つ男の顔は、丁度横溝正史あたりの探偵小説に出て来そうな正視出来ない不気味な顔である。その男がいかにも器用そうに弾いているアコーディオンの伴奏につれて次から次へと唄を歌つていく女は、その男の連れ合いなのだろうか、それとも兄妹なのだろうか。時々いたわるように男の顔をみつめる女は、男と同様にくたびれたようなよごれた衣服をたゞ身にまとつていと云うだけの姿で男が醜い顔を無理にはごらばせて、さも興に乗っているかのようになり、眼のない首をふり、時には上半身を左右にふつて弾くアコーディオンの伴奏に眞面目くさつた顔付で唄を歌っている。

私はのぞきこんだ顔をひつとめて連れの友人

か、ますく力を入れてアコーディオンを弾き始めた。

私はそれ以上男を見るに忍びなかつた。金をやるうかと思つた。私はズボンのポケットに手を入れてペンシヤンコになつて居る財布をそつと握つてみた。この財布からなげなしの金を取り出して……衆人環視の中で醜い男に近すぎ、僅かな金を與える自分の姿を私は先ず想像してみた。だが全然見も知らぬ他人の前で、そのような行爲をむたと云う事からくる處女のような羞恥心と徒らに手をこまねいている不人情な人々を出し抜いたと云う自己満足の外に自分は、こんな善い事をしたんだぞと、肩をそびやかすような虚栄心を意識すると、前に立つている人々の身體がそのまゝ硬直してどうしても越える事の出来ない高い岩壁のように私の眼の前にそつと立ち上つて来たのである。お前は本當は、あの男を可哀想だと思つてやつたのだと云いたいのだろうか、そんな事はほんのデョツピリで、お

を見た。彼は無表情な顔でまだのぞきこんで居る。私は他の人々の表情に注意してみた。どれもこれも無表情な顔だつた。私にはそのように見えた。こゝに黒山のようにだんだん集まつてくる人には、一體何を見ているのだろうかとは考えてみた。あの醜い男の顔だろうか。それともアカで汚れた女の唄を聞いているのだろうか。世にもあはれな醜い男の顔を無料の見世物でも見ているつもりなのだろうか。若し醜い男の顔を單なる見世物として見ているのであつたとしても醫學的な標本にも比すべきあの醜い顔を持つ男に何らかの形でそれ相當の代價を拂はなければならぬ。唄を歌つてはいてもそれは明らかに物乞いであ。以上そこには或る程度の憐愍が見ている人々の心の中にかすかながらも湧いてくるはずである。然し人々は、醜い男との間に眼に見えない網がはりめぐらしてあるかのやうに、それ以上男に近よろうとはしなかつた。醜い男は近寄ろうとはしない見物人を意識して頭の中に聞いた。

然し……私は心の中でわめいた。それはたつた一瞬の間、私の心を捉えたものであつたとしても、私はあの醜い男を可哀想な人だと思つてやろうとしたのだ。私の行爲が單なる演技にしか過ぎないとしても愛に基づき行爲のみが美しいと云う平凡な眞理を私は、心から肯定したいのだ。それなのに、私の眼の前に急に湧き上つた岩壁をどうする事も出来ない私なのだ。その岩壁は一體私の何だろうか。どうしてその岩壁を意識しなければならぬのであろうか……

はじめは、一番後でつま先立つてのぞきこんでいたはずの私は、何時の間にか私の後にも私と同じやうに顔を突き出している人々がいる事に気がついた。すると私の後で、

「おいみるよ、今あの男に金をやるうとしてい

るのは、うちの社長だぜ」
 「なに、本當か、あゝ本當だ、社長もなか／＼
 味のある事をやるね」
 「なあに、どうせボロイ儲けをしてるんだ。社
 長にとつちや百圓札の一枚や二枚何でもありや
 しないよ」

「それもそうだ。だけど俺達にもあの調子で恵
 んでくれると有難いんだが……」

「どうして／＼俺達なんかよりも乞食にくれて
 やつた方があの通りお辭儀してもらえらるんだか
 ら、社長にしてみれば、どんなにか得意だろう
 よ、おい社長に見つからない中に歸ろうよ」
 「と小さな聲でさゝやき合つてゐるのを耳にし
 た。私はより以上に顔をつき出してのぞきこむ
 と、すんぐりと肥つた小柄な男が大きな紙幣を
 唄を歌つてゐる女とアコーディオンを弾いてい
 る醜い男にそれ／＼一枚づつ、蕙んでやつた所だ
 った。その男は、自分の身體に集中して來る觀
 衆の視線を意識して大酒家らしいあから顔をや

り一層紅潮させて人だかりの中にもぐりこんで
 しまつた。

ホツとしたような然し苦い藥を無理に飲みこ
 んだような氣持におそわれた私は、何時の間に
 かボケツドの中で握つていた財布をボケツドの
 底に落しているのに氣がついた。さつき私の後
 でさゝやき合つてゐた男達の會話はともかくと
 してあの社長の内面的な心理がどのやうに醜惡
 なものであつても表面に現われた行爲が美しい
 ものであれば、人はそれを善行だと見做すであ
 ろう。あの醜い男と唄を歌つてゐる女は、それ
 によつて救はれてゐるのだと云えるかも知れな
 い。投げられた一錢をさぐりで拾ひ集めるこ
 とによつて醜い男は、今宵の飢を逃がれること
 が出来るのかも知れない。たゞその一錢が侮
 蔑と嘲笑をこめて地面にたゞきつけられた一錢
 であつてもアコーディオンを弾いてゐる男は、
 下手な唄を歌つてゐる女は、當然の代價として
 當然のように受取るのであろう。如何に美しい

心を持つていたとしても男に一錢をも與えなか
 つたならば、男は世の無情を歎くかも知れない。
 否かえつてこの醜い自分に一錢も與えられない
 世の中を輕蔑するかも知れない。だからアコー
 ディオンを弾いてゐる男が盲であつたのを幸に
 私も金を投げればよかつたのだ。今からでも遅
 くはないと私は思つた。私は、又財布を握りし
 めた。然しあのすんぐりとした小柄な社長のあ
 から顔が私の眼の前に一杯に廣がつてくるので
 あつた。

95
 私は、傍らに立つてゐる友人の手を引いてこ
 の人だからから抜け出した。私はオーパーの襟
 を立て、その中に首をうずめて歩いた。何も云
 いたくない私は、友人と口を開くのが恐ろしか
 つたが、彼も何も云はないのが有難かつた。た
 とい不具の爲に、食うに困つた爲には云い乍
 ら、見世物のような存在にまでなつてゐる同類
 が情けなかつたのだと妙な辯解をしてゐるので
 あつたが、あのような事までしなければその日

の食に事を缺く人々がゐると云う事、そして何
 をして／＼も食つて生きていかなければならない
 人間に課せられてゐる嚴しい試験を思うと、た
 ゝ無駄にその日を送つてゐる自分に對して私は
 いたゞまれない焦燥を覺えるのであつた。

逃げるように驛の中へ足を踏み入れた時、降
 車口から出て來た二人の女學生が驛前廣場の人
 だかりをみつめて

「あ、今日も出てるわ、貴女見た？」

「なにお」

「盲のアコーディオン弾き、すごいよ、お化
 けみたい」

「そうお」

「見て行きましょうか」

と會話してゐるのを耳にしてこゝにも單なる
 見物人がゐると私は思つた。ついさつきまで私
 自身もそうであつたように、無感動な見物人に
 取りかこまれて醜い男と女は、明日も明後日も
 アコーディオンを弾き、唄を歌いつゞけて行く

のであろう。然し醜いアコーデオンの音、見えない眼には、果して照る日曇る日を見分ける力があるのだろうか。

乗車券を手にした私は、改札口に近ずいた。だがこれでは、どうなるか。私の耳には、あの訴えるような、アコーデオンの音が聞こえて来た。私は地面に吸いつけられたように動けなくなった。他人の行動を批判しておき乍ら、結局は他人の善行まで傍観していた私ではなかつたが。他人の行動はどうあるかと私は私であると云う小さい觀念の中に取りつかれていた私ではなかつたか。卑怯者！自己に忠實になれない裏切者！

私は私の身體全體にまつわりついてくる見えない何物かをふりもぎる様に、友人をおいて改札口を夢中で駆け抜けてホームに發着する電車の騒音の中に飛び込んだ。

七福定期預金抽籤會に拾う

本部 熊本 潔

増銀最初の企畫である七福定期の抽籤會は、本部總動員の活動によつて準備は成つたが、何事もその準備する迄の勞苦は大變なもので企畫課のY氏はこのかくれた力となつて、連日奮闘東奔西走して、業務課へ來てはダンベエ調（忍言葉？）を盛んに連發して連絡に餘念がない。やつと當日迄に漕ぎつけた朝には流石張り切り屋の彼氏もいさゝか寝不足の腫をしばたせて階段を登つて來たので、大變でした。お疲れでしょう」と言葉をかけたら、例の獨特の大きな聲で、もうこれで安心ダンベエ」と涼しい顔には思はずつり込まれて微笑する。

これと好一對は調度課のA氏、出演者の交渉を引受けて演藝本部へ日参、ところが何がさて銀行人とは違ひルーズな藝人達のこと、と果し

て約束通り來るか來ないか、プロを睨んでの思案顔。これからは僕の責任だからね」とさて定刻三分過ぎて出演トップの樂團南十字星が來ない。困つたね」と後頭部の髪の毛をつまんだり撫でたり。プロを差し替えて歌笑の落語で場をつないでいると、やつと驛に到着の報知が入ると、それ下ラックで迎えに行け」と大きなところを見せたが、安心はしても彼氏の有名（？）な癖は納まらず益々、後頭部の髪へ手が行く。見ていた女の子が、Aさんあんなに髪の毛つまんで痛くないのかしら。頭に神経ないのかも知れない」とはちと悪口が過ぎるようだ。

97 次は人事課のK氏、知る人ぞ知る達筆家。大きい字、小さい字、何でも惚々とする程うまく書きこなしで行く腕前は、大したもの。記録係を仰せつかつたのは當然。處が會場で高さ約二間のキヤタツに乗つて當籤番號を記入すると聞いて、高い處は御免だよ、梯子をかけて屋根のゴ

ミも取れないから、そんな高い處では手がふるえて字を書くななんて思ひもよらない」と小さな聲だつたが、これを知つた原田業務課長、抽籤打合せの席上で、Kさんは心臓が弱いので」と發表したので俄然女の子の同情が集る。結局會川氏がキヤタツに登ることに依つて落着いたもの、彼氏とんだ處で弱い心臓を暴露されて、青くなつたり赤くなつたり。

では會場へマイクを移そう。受付は検査課の面々。入場券なき人は絶對お断りとは言つたもの、定期證書を出されては、それでもとも言えないお客さんばかり。定刻には忽ち超満員。そんな多忙のうちにも、これは誰の奥さん。これはお母さん」と行員の家族連を探し出す邊り、検査課の目に狂いはない。職業意識は自然と出て來るから恐いもの。

さていよいよ、抽籤の幕が開く。先ず大谷頭取の挨拶である。貴公子然と端麗な姿でマイクに立つ。三千觀客を前にしては、いつもの支店長

會議で訓示する時とは様子が違うのか、左手に握つた原稿が時々無意識に二三寸上つて、見てゐる方で氣になるが或はこれは頭取の癖で、一種のゼスチュアールであつたかも知れない。然したつた一度原稿を見ただけで、堂々と挨拶を終られたら期せずして萬雷の拍手が起つた。變つて待ちに待つた抽籤。その抽籤機を前にしたのは本部各課粒擇りの美人揃い。白い上衣に赤い花の胸飾り、黒髪には白いバラの花。パツと咲いた百合に舞臺が急に明るくなる。見るからに新鮮で、映畫スターにも負けないニユーフェースばかり。惜しいかな初舞臺の所爲か、素人の所爲か、あまりに無表情すぎて、人形が動いてゐる感じ。もし愛嬌があつても、思われたので舞臺裏へ来てから少々堅くなり過ぎたねと言つたら、練習の折、川崎アナ氏から舞臺へ出たら微笑せよと注意されていたのを緊張のあまり、誰もが忘れてしまつて、後になつて氣がついたとのこと。

「まあ美しいこと、右の娘が好き、左の娘に愛嬌が、あの後列の娘の優しい瞳」と客席で遠慮のないさゝやき。中には俣の嫁にと思つて見えていたかも知れない。女の子が堅くなるのも、無理はない。

その華やかさと幕一重の舞臺裏に出演者係に調度課の女の子二人。それ辨當よ、それお茶よ、みかんだ、炭だと七十名にも及ぶ出演者の接待に一刻の休みもない重労働。汗だくの活躍振りには案外氣のつく人がなく氣の毒であつたがこれを縁の下力と心得ているのか、舞臺に一番近くいて一度も覗く隙がなかつた」と明るい顔で答えてくれた。正に表彰に價する人々ではある。

うそくらぶ

川越支店 T・K 一生

一、A君の話

私は當店の計算係なのですが今日も、もう電報報告をしなければならぬ日になつたので、一生懸命そろばんをやつて居ました。

後一つで計算が終ると云うとき支店長に呼ばれました。具合が悪く丁度母店へかけた電話が出たとのこと、どつちへ行つてよいものか、私はうらめしげに最後の計算書をにらめながら支店長の處へ参りました。ところが又あいにく話が長いのです。もう電話の制限時間が切れてしまふので氣が氣ではありません。いらいらして支店長と支店長の後にある時計と交々にながめる始末です。やつと話が終つたものから私は大急ぎで私の席へ歸つて最後の集計をしようと思いました。

するとどうでしょう！もう十年も私と一緒で働いて居る私のそろばんは、私の居ない間にちやんと計算をしてくれて、合計が出て居ました。私がよろこんでそれをすぐに報告した事は云う迄ありません。

え？その計算は間違つて居たらうつて？

とんでもない！十年も私と一緒に働いて居るそろばんですもの間違ひがある筈はありませんでしたよ。

二、B嬢の話

私の話はこちらなのです。

昨日支店長さんから突然〇支店へ大至急現金を持つて行つてくれと云われたのです。いつもこんな事はないのだそうですが〇支店で多額の現金支拂があつたものだから早くお金を送つてくれつて云つて来たのです。けれど私まだ〇町の〇支店には一度も行つた事が無いので困つてしまいました。それに私一人で行かなければならないのです。でも仕方ありませんから、急いで仕度をして現金をかゝえて驛へかけつけました。

丁度良い具合に〇町行の電車が来て居たものですからすぐそれに乗りました。やつと〇町の驛に下りたのですけれど、どつ

ちへ行つていゝかと思つて驛前で立止まつて居ました。

すると私の前に自轉車を持つた男の人がやつて来て、

「もし貴女はD町の銀行の方でしょうか？」と云うのです。見ると私も見覚えのあるC支店の小使さんでした。彼は私のくるのを待つて居たらしいのです。早口に云いました。

「早くこの自轉車にお乗り下さい。もう銀行では貴女のお出でを待つて居るんですよ、さあ早く！」そして彼は私の持つて来た現金を車の後の臺へつけてくれました。

私は自轉車には餘り乗つた事もなし、又D町の銀行の場所も知らないのです。しかし小使さんの早くくとせき立てるのでとうとう自轉車に乗りました。

すると自轉車はまるで私の乗るのを足踏みして待つて居たかの様にビュッとほしり出したのです。その早いこと、私の足がペダルを回轉

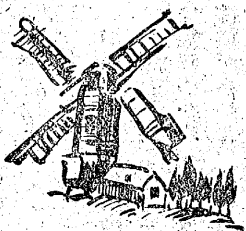
させるのがまにあわないくらいです。勿論小使さんは、はるか後になつてしまいました。

そして私の乗つて居る自轉車は四辻へ行くとくるりと右へまがつて、又一はしりすると今度は左にまがるのです。しばらく行くとピタリと止りました。

見るとC支店の前です銀行には一ぱいお客さんが待つて居ますC支店の支店長さんがすぐ中から飛び出すと、私と私の持つて来た現金をかゝえる様にして中へ連れて来ました。

それでやつとお金が間に合つたのですが、私はC支店の支店長以下自轉車迄がこんなな一生懸命に働いて居るのを見てまづたく感心してしまいました。

勿論こんな支店は表彰ものだと思いますわ。



銀嶺批判

あれやこれや

本部 原田愛助

「銀嶺」創刊號はすばらしい出来栄であつた。堂々百頁に近いものが出来上つた事は、編輯委員の勞苦もさることながら、投稿者各位の熱意の程も窺はれて、力強い限りである。これでこそ、屋野氏の言はるゝ通り本誌が「躍進埼玉銀行の叡智となり、明朗埼玉銀行の姿態」となる事は疑いない。

第二號がどんな形で現はれて来るか楽しみである。併し創刊號の手前餘り減頁することは、などと顧慮する事は無用である。たとえ五〇頁になり三〇頁になつても結構だ。要は量より質の問題である。

創刊號では、隨筆欄に佳品が揃つた様である。齋藤氏の「隨感」島田氏の「そろばん」など好讀物であつたが、とりわけ武田氏の「圓滿な顔にならう」は逸品として推奨したい。

創作欄を読んで感じた事は、作品の中に無理にむづかしい事を言はうとして居る傾きがありはしないか、といふ點である。誰が讀んでも解るのが好いのだと思ふ。

作者獨り肩を張つて力んで見ても、讀む方はうり出してつては何にもならない。

新かなづかい、は簡單のやうだがさて正確に

使ふとなると、なか／＼むづかしいものである。本誌の投稿にも新かなづかひを使用して下さい、と書いてあるが、その「投稿に對する注意」の中にも、野崎氏の編輯後記の中にも、新舊かなづかひが混用されて居る。

どんな小さな問題でも完璧を期するには、相當の勉強が要る。(本稿は舊かなづかひのつもり)

○ 或る支店で洗面所の鏡の側に、新しい傳票が一冊ブラ下げてあるので、本部から行った人が、これは何に使ふのですかと訊いたら、櫛を拭く爲だと答へたさうだ。

何を言はん。

○ 浦和、川口地區の連合代議員會で、執行委員に當選した福田氏の第一聲に「今後の組合運動は經營の合理化を目標として進む可きだ」との言葉があつた。寔に同感である。

二百三十五名の代議員から「先づ何から如何に合理化す可きか？」について一人一件宛でもいゝから回答を取つたら、大した資料になるだらう。

○ 先日某銀行の支店を訪問した所、受付の女子行員をはじめ茶を運んで来る給仕さんまで、まことに懇懇丁寧でしかも愛想が好いのにすつかり感心して、早速支店長に讃辭を呈したら、その支店長の曰く「私は女子行員に對していつも斯う言つてゐるのです。君達は毎日營業室で何十人何百人のお客さんと、見合ひをして居るのと同じなのだから、そのつもりで言葉付態度に氣を付ける様に」と。

これはそのまゝ若い男子行員にも當てはめて差支ない言葉である。

○ またこんな話もある。先頃川越南支店へ行つたら田島次長が一枚の葉書を出して、こんな投

書が來ましたよ、といふ。

読んで見たら「預金者より」として「私は昨日はじめて僅かばかりの預金に行つた者であるが、窓口の女の方が非常に親切で愛想よく應對して呉れたので實に氣持がよかつた」といふ意味のことが書いてあつた。

銀行などへ來る投書といへば、嬉しい内容のものはないものであるが、こんな投書があつちの支店にもこつちの支店にも來る様になりたものである。

「銀嶺」をよむ

蓮田支店

實

われ／＼の團結のシンボルたる「銀嶺」創刊號を全部と云う全部に、目を通しておりませんが、中でも主だつたものを拾ひ讀みしての感じ

です。最初の頁の目次を一見して感ずいたものです

が、何にもこたはりなく無限大の範圍に於て思い切つたまゝに無雜作に書いている事は大變感心させられます。

○ 評論、隨筆、詩藻、創作等配置良く機關誌としての價値が高い様に思われます。然し論叢が多い割に比較的一般に親しまれる詩藻が少いのが一寸淋しい感じがする。そして智識や教養が得られはするがわれ／＼の機關誌としては入り難い氣もした。

全體的に見て感情的といふよりも知性的な氣配が感じられる。銀行人の一般的傾向が伺われるが、しかし之れは創刊號なるが故に一部に傾よつた嫌があるのだらう。

○ 評論の中の「勤勞意慾について」を見て同感にたえず夢中によんだ。

「美しく、楽しく拜見したのは「悲境に泣く十錢札」「木犀の想い出」又四六頁よりの詩藻であつた。

最後に希望するのは古典文學を氣候行事等に

ちなんで、われ／＼の「銀嶺」の中に挿入してほしい。
ともかくも自分は論ずべき批判は持たない。
只感情のまゝに

銀嶺に寄せて

秩父支店 しげり

現實の大地にがつしりと足を踏みしめ
理想の青空に巍然としてその頭角をもたぐ
目もくらむ白雪は純潔をあらわし
いかれる肩は意志の強さを物語っている
理想に走らず 現實に墮さず
常に高きを望み 向上を求めつゝ
正義のシンボル
躍進の象徴
銀嶺

私は今どつと銀嶺のいたゞきを見つめている

人跡未踏の地
千古の秘密をこめた幽幻境
頂上はどんな所だろうか？
我々人間が地球上に生を享けてから
何百何千億の人が極め様として極められなかつた
銀嶺のいたゞき

私は 否我々は 今そのいたゞきに向つて歩みを續けている
疲れた四肢にむちうち
困ばいした體に汗をしばり乍ら
我々は登りつゞける
吹雪が身を凍らせ
萬里の雪溪が前進をはどみ
固い氷の壁が行手をさへぎり
とつごつたる岩石が足をやぶろうとも
歩みを止めてはならない
——我々の意志と勇氣の力を以つて——

どの道を行くかは 我等の自由であり
新しき道を拓く事も亦一つの方法である
しかし選ぶべき道は あくまでも
頂上への道 でなければならぬ
絶壁につき當つて安易な下界への下り道を歩いたり
日だまりの山ふところて甘い木の實に道草を喰つたり
自分が登る爲に人を崖から突き落す事も亦許されないのだ
互にはげまし スクラム組んで
登れ いたゞきへ
行け 頂上へ
そこには百花れう亂たる理想の花園がある
頂上への努力
それが我々の幸福探究であり
民族永遠の平和を見出す所以でもある

編輯後記

創刊號の校正を受持つた私は、かなり細心の注意をしたつもりが、印刷出来て見ると、誤字が大分目について申譯なく思う。銀嶺の批評、感想があまり聞かれないのは淋しい気がする。編輯方針に付ての意見もあるが、まだ何々特輯とする程、原稿も集まらぬから、當分の間は、組合員の意志發表の機關誌として發展させて行きたいから、何でも結構としどし投稿して欲しい。ことに女子組合員の投稿が少いが、折角の才部を埋れさすことなく、主義主張は堂々と發表して文化女性の自覺を促し、男女同權の意のあるところを、再認識すべきではなからうか。何れにせよ折角の「銀嶺」を三號雜誌に終らせたくないで、編輯員一同張り切つて更に良い機關誌とすべく努力してきますから、より楽しい明るい紙面とするよう皆様の投稿を期待します。
(熊本)

投稿募集に對する注意

- 一、原稿用紙は四百字詰に限りません。
- 一、新かなづかいを使用して下さい。
- 一、字體はハツキリと楷書で書いて、點、丸は必ず一字ずつあけて下さい。
- 一、紙上匿名は隨意ですが別に所屬店名、本名をお書き添え下さい。
- 一、應募作品は何でも結構ですが、論說、隨筆、小説、俳句、川柳、短歌等は特に歡迎致しますとしく、應募下さい。
- 一、本誌に關する批評、感想、希望は遠慮なく申出下さい。
- 一、應募原稿は一切お返却致しませんから豫め御諒承下さい。
- 一、原稿の採否、訂正等は編集委員會で致しますから一任願います。
- 一、原稿の送り先は左記です。

浦和市高砂町二丁目
 埼玉銀行内
 従業員組合機關誌「銀嶺」編集部宛

發行日 昭和廿四年四月五日發行

非賣品

浦和市高砂町二丁目一六二番地
 發行者 埼玉銀行従業員組合

代表者 野崎敏夫

印刷者 永田忠也

印刷所 東京都中央區銀座西一ノ三
 グローリア公業株式會社

書庫
 館内用

貴重書

埼玉県立図書館



31062623

0